



340
28

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始



15.9.13

最 新 刊

340
28

河村定靜著

教訓
叢書
一休禪師百話

東京 求光閣發行

340-28

河村定靜著

教訓
叢書

休禪師百話

東京求光閣發行

大正
4. 5. 18
丙交

序

- 一 本書は、一休和尚の事實の、尤も信用するに足ることのみを撰らんで、記録せしものなり、
- 一 本書は、後人の一休の名を假りて、事實を捏造せしと思はるゝものは、すべて取らぬこととせり、これ一休の美をなさんとして、却つてその眞を失はんことを恐れてなり、
- 一 本書は、その眞を失はんことを恐れ、その文章をもなるべくは、古人の作そのまゝを記載するやうに務めたり、當今は、言文一致、特に講談風らしく書きたるもの、流

二
行する時節なるも、去りとはあまりにいやしければ、
故意と古人の文をそのまま、取れるなり、讀者この意を諒
せよ。

大正四年四月

撰者識

叢書 教訓 一休禪師百話

目次

- (一) 一休和尚の誕生……………一
- (二) 一休和尚の幼時……………二
- (三) 八歳にして大徳寺に入らせらる……………三
- (四) 母親臨終のいましめ……………四
- (五) 蛇の目の茶碗……………六
- (六) 飴つぼをうち破る……………八
- (七) うしろむきにて讀經す……………二
- (八) 生て居るか死んで居るか……………三
- (九) ふたを取らずに喰へ……………四

二

(一〇) 雲にかくれて……………一五

(一一) 皮袴……………一六

(一二) 此のはしわたることかたく禁制なり……………一七

(一三) 黒ごろも……………一九

(一四) 鎌倉街道……………二〇

(一五) からざけ……………二一

(一六) 鯉……………二三

(一七) 一やすみ……………二五

(一八) 四休居士……………二七

(一九) 三平二満……………二九

(二〇) 蜷川新左衛門親當……………三〇

(二一) 左近尉……………三五

(三三) 關の地藏……………三七

(三三) 戀の病……………四一

(三四) 蛸……………四五

(三五) 喰つた魚を水中に吐き出せば游泳す……………四七

(三六) 紫野丹波近……………五〇

(三七) 書 贊……………五一

(三八) 五百羅漢の名……………五四

(三九) 御用心く……………五六

(三〇) 珍なる引導……………六〇

(三一) 善導と法然の畫像の讚……………六二

(三二) 日蓮の畫讚……………六四

(三三) 半金色善導大師……………六六

三

(三四) 法力くらべ…………… 六八

(三五) 女を水葬にす…………… 七一

(三六) 大きくしてよめやすき文字…………… 七四

(三七) 靈照女の畫讚…………… 七六

(三八) 貧のぬすみ…………… 七九

(三九) 極樂は又六の門にあり…………… 八二

(四〇) 汝が俗よ…………… 八三

(四一) 蜷川新左衛門の臨終…………… 八五

(四二) 無實の離別…………… 九〇

(四三) 四十雀の引導…………… 九三

(四四) 蛇のひげ…………… 九五

(四五) 口瘡の妙藥…………… 九六

(四六) 彌五郎俵…………… 九八

(四七) 畫像の迷惑…………… 一〇〇

(四八) にごり川通りそこぬけびしやくの町…………… 一〇二

(四九) 三七日…………… 一〇五

(五〇) 極小なるもの…………… 一〇五

(五一) 大の上に又大あり…………… 一〇九

(五二) 乞食となりて檀家に行く…………… 一一二

(五三) 虚空に座す…………… 一一五

(五四) 自心自佛…………… 一二七

(五五) 魚を釣りにて食す…………… 一二〇

(五六) 高野山に登る…………… 一二四

(五七) 熊野に參詣す…………… 一二九

六

(五八)	人の女房を口説く……………	一三六
(五九)	ふぐを喰つて死せしものゝ引導……………	一四〇
(六〇)	廣大無邊の精靈棚……………	一四二
(六一)	扇の五戒……………	一四四
(六二)	狗子佛性……………	一四九
(六三)	大風大雨見舞……………	一五二
(六四)	自からふいて行く……………	一五四
(六五)	下より上にさがれるもの……………	一五五
(六六)	濁 酒……………	一五七
(六七)	釋迦も達磨もひよい／＼と出る……………	一五六
(六八)	死に來る人はみなおつる……………	一五九
(六九)	桂川の水なり……………	一六〇

(七〇)	末期の句……………	一六二
(七一)	自畫自賛の御影……………	一六三
(七二)	虚堂の再來……………	一六五
(七三)	一休の木像……………	一六六
(七四)	寒山子に似たり……………	一六六
(七五)	一休和尚の狂詩二十首……………	一六八
(七六)	制札を仆して錢を取る……………	一七三
(七七)	別法山心外寺……………	一七七
(七八)	人たる人人たらざる人……………	一七九
(七九)	請受り……………	一八〇
(八〇)	珍 寶……………	一八一
(八一)	ちんちくりん……………	一八二

(八二)	くせがつく……………	一八四
(八三)	ひえの山路をひろひゆく……………	一八六
(八四)	大食家の戒め……………	一八七
(八五)	浪士の究難を救ふ……………	一八九
(八六)	粥の字の由來……………	一九二
(八七)	笑の字の由來……………	一九四
(八八)	金の字の由來……………	一九五
(八九)	馬じやげな……………	一九七
(九〇)	見ざる聞ざる言ざるの因縁……………	二〇〇
(九一)	へちまの皮をおくる……………	二〇三
(九二)	子は寶なり……………	二〇四
(九三)	瓢箪の曲遊……………	二〇八

目次終

(九四)	地獄極樂……………	二一〇
(九五)	春 べ……………	二一一
(九六)	桂川の失策……………	二二二
(九七)	まつすぐに見る……………	二二三
(九八)	天文博士……………	二二四
(九九)	男色にふける……………	二二七
(一〇〇)	善惡をなすみなもと……………	二二八



▲近刊

大庭三郎著

教訓
叢書

ナポレオン百話

定價 金二十五錢
郵税 金四錢

教訓
叢書

ワシントン百話

定價 金二十五錢
郵税 金四錢

叢書訓一休禪師百話

川村北溟著

一休和尚の誕生



(1) 話百師禪休一

一休和尚は、應永元年十二月二十八日を以つて、京師にて御降誕あらせられたる方なり、御父は、かたじけなくも一天萬乗の大君、後小松天皇と申し奉つり、御母は、伊豫の局と申せり、和尚は第二の皇子にわたらせられしも、或る事情のため、おもてむきには天皇第二の御子とは言はれぬ方なりし、これ御母伊豫の局の身分のいやしきためと、藤原氏の出にあらざるものは、皇子の列にあることをさへも、許さざりしたためなりしなり、當時は藤原氏の跋扈實に甚だし

く、皇帝といへども、その鼻息を伺ひて以て、天下の政事を決せられし程ゆゑ、一人の皇子の御身さへ、思ふやうにはからせ給ふことは能はざりしものと見へたり、是れ世を捨て、僧籍に入らせ給へし所以ならんか、

二 一休和尚の幼時

一休和尚は、幼時を千菊丸と稱せられたり、おんうまれつき聰明慧智にましく、一を聞いて十を知られ、百を聞いて千を悟ると云ふおありさまにて、尋常人とは何處となく、かはらせ給ふところありし、

おん母伊豫の局は、世に聞へたる賢婦人なりしかば、おもてむき第二の皇子と稱しがたきを口おしく思はれ、如何にもして立派なる皇子

子に育て上げ、一は父帝の大御心を安め奉つり、一は母のいやしきものなるにも係らず、如何にも立派なる御子様よと、世にも人にも言はしめんと心の心より、乳母は言ふまでもなく、おつきの人々に至るまで、それく其の人才を撰らみて、最と大切に御養育申し上げたり、是において美玉は益々その光輝を増して、後世畏るべき大偉人を養成するに至れるなり、

三 八歳にして大徳寺に入らせらる

前條にも既に言へるが如く、千菊丸は皇子とはいへども、おもてむき後小松天皇第二のおん子とは言はれぬ方なりしより、母なる人は最と口惜しく思はれ、皇子の行末をいろく心に心配せられての後、いつそ僧侶として一生佛弟子となし、一切衆生のために盡くさせる

は、その子のためにもなり、又世のため人のためにもなるべしと云ふ確心となられ、遂にその年八歳にして京都の紫野の、大徳寺といふ禪宗寺の養叟禪師といふ大智識の御弟子となし、佛法を修行さるゝことゝはなれるなり。

四 母親臨終のいましめ

我事、今娑婆の縁あひ盡き、無爲の都におもむきい、おん身出家に成りたまひて、佛性の見をみがき、その目より我等地獄におつるか、落ちざるか、不断添ふか、添はざるかを見たまふべし、釋迦、達磨をも奴となしたまふほどの、人と成りたまひいへば、俗にても苦しからずい、佛四十餘年説法したまひ、終に一字不説とのたまひし上は、我と見、我と悟るが肝要にい、されば何事も妄

想することなかれ、あなしこ、

九月上旬

千菊丸どのへ

不生不死の身

かへすゝも、方便の説をのみ守るの人は、くそ虫となじにい八万の諸聖教をよみても、佛性の見をみが、すんば、この文ほどのことも、解しがたかるべし、

これとても、かりそめならぬ、別れては、

かたみとも見よ、水くきの痕

千菊丸は、大徳寺に入りて三年、十一歳の時に母なる人よりこの遺言書を受け取り、いよくますます發憤して、佛法を修行さるゝやうになれり、この親にしてこの子ありとは、信にこの母子の如きものをいへるなり、

五 蛇の目の茶碗

千菊丸も、大徳寺に入りて、養叟禪師の御弟子となりしのは、髪をおろして宗純と改名されたりされど、以下には宗純と言はず、一休と稱することゝすべし、さてこのお寺の什物に、蛇目の茶碗と稱する名器ありて、養叟禪師のこれを大切にせらるゝこと、常ひと通りならざりしかば、小僧などには、一切見ることを許されざりし、一休は何卒して、一目これを見たとしと思はれ、その時機を伺ふて居られしが、ある日のこと、養叟禪師には所用ありて他出され、一休は幸にも留守居することゝなれり、一休は大いによろこび、朋輩なる小僧どもをかたらひ、什物の蛇目茶碗を取り出し、これがこのお寺一番の寶物よ、よく見て

おくべきぞとて、互ひに手から手に傳へ、うちかへして見、ひねくり廻して見てゐるうちに、遂に手をはづして取りおとし、大切の品を碎してしまひたり、小僧どもはおどろきさわげども、外に詮すべもなければ、たい茫然として居るところへ、折りあしくも養叟禪師は、所用さきからおかへりになれり、小僧どもは周章まどひ、身のおくところも知らざる様なるに、一休は心に期するところあると見へ、平然としてさらにおどろける色も見へざりし、しかして禪師の一室のうちに入らるゝや、一休はそのあとを追いて一室のうちに入り、忽ち問ふて曰く、この世に生きとし生けるものは、その結果いかになり行くぞと、養叟曰ふ、生者必滅といふて、生きとし生けるものは、かならず一たびは滅するものぞと、一休さらに問ふて曰ふさらば、その滅する時期は如何にと、養叟曰ふ、時節到來すればな

りと、一休すかさず、かの荷けたる茶碗を取り出し、禪師に云ふには、時節到來して、此くの如くになれりと、養叟も一時は呆然とされまじたけれども、その才智の頓發を愛され、深くその非を問はざりしと云ふ、

六 飴つぼをうち破る

養叟禪師は、いたく水飴を好まれ、いつも一つの壺に一杯入れて、これをたくはへ置かれしが、小僧どもにぬすみ喰ひせらるゝをおそれたまひ、ある日一同のものをいまして、この品は、年老いたるものには薬となれども、年若のもの、特に小供がこれを食べるときは、かならず毒となりて、死することあれば、ゆめくこれを食べることなかれと申しわたされける、一休は師の坊には、おかしなこ

とを、言はるゝものかな、我等を小供なりとおぼしめして、かく戒しめらるゝものならんかと、思はれけれども、その日はまづそれにておはれり、されど人情はおかしきものにて、これは毒なり、口に入れてはならぬと言はるゝときは、言はるゝほど口に入れたく思ふものなり、まして一休の如く目から鼻にぬけるほどの發明なる小供にありては、そのいましめをきいて信せぬも無理ならぬことゝいふべきなり、

一休は、師の坊のいましめをきかぬ間は、別に氣にも止めずに居りしが、一度いましめをきいてのちは、その毒と言はれたものを、喰つて見たくて堪らず、折もあらばためして見んと、師の坊の不在となる日のみを待ち居りしが、ある日のこと、師の坊は所用ありて他出されたり、一休はこのひまにこそと、密かに師の坊の居室に忍

び行き、かの飴壺をとりだし、一なめ嘗めて見んとせしも、高き棚の上うへにありしところから、一つの箱はこを持ちきたりて、それにのぼり飴壺あめつぼを取りおろさんとして手てをはづし、頭あたまから水飴みづあめをあびられたりこれは失敗しくじたりと思はれしも、今は詮せんすべもなかりければ、あたまや衣ころもにつける飴あめをばそのまゝにして、先づ取りあへず一なめ嘗めこゝろみしところ、何んとも言はれぬほどの風味ふうみなりし、こゝにおいて一休いっしゅうは、二なめ三なめ、四なめ五なめと、なめるはく、飴壺あめつぼにありし飴あめを、あらかたなめつくしてしまへり、さてなめつくしてか
ら氣きのつきしは、この跡始末あとしまつをいかにすべきといふ問題問題なりしが、忽たちまち一計いっけいを案出あんしゅつし、師しの坊ぼうの常つねに大切たいせつにしておかるゝところの青磁せいじの茶碗ちawanを取だし、これを石いしにあて、微塵みじんに碎くだき、その茶碗ちawanを前まへにおき、飴あめを身體からだ中ちゆうになすりつけ、さめくと泣なきあたり、師しの坊ぼうは所

用もちはて、寺てらにかへりて見らるれば、一休いっしゅうはからだ中ちゆうにあめをなすりつけ、碎くだれた、青磁せいじの茶碗ちawanを前まへにおいて、泣なき居ゐるさまを一見いけんされ何事なにごとぞやと問とひたまへば、一休いっしゅうはさらにさめくと泣なき出いだし、お師匠ししやうさまの大切たいせつにあそばさるゝ、青磁せいじの茶碗ちawanを取りおとし、破壊こぼしてゆゑ、何んともお申しわけなくいへば、いつそ死しんでお申しわけするがよしと、日頃ひごろお師匠ししやうさまのおいませなされし、この飴あめを喰たべて、死しなんものとはかりましたけれども、たい甘あまいばかりでさら死しに相あもないので、かくの始末しまつにいとて、又またさめくと泣なき出いせり、養叟やうそう禪師ぜんしは一休いっしゅうの奴やつめ、さとりたなと思し召めしけれど、その心こころのひろきこと大海たいかいの如ごとくなれば、いやくと、死しするに及およばぬ、その罪つみはゆるしてやるぞと仰おほせせられ、そのまゝ奥おくに入いられたり、

七 うしろむきにて讀經す

ある日養叟禪師は、一休に命じて本堂の燈明を消して來れと言はれたり、一休は唯々として走り行きしが、たちまち經机をふみ臺として、伸びあがりながら、ふつ／＼と息を吹きかけ、僅かに心あかしの消し得てかへれば、禪師は一休にむかひ、いかにして消しきたりしや、何物にて消しきたりしやと問はる、一休は平氣にてふつ／＼と、口いきを吹きかけて消して參りひと言へば、それはよろしくない、口にはもろ／＼の不淨を喰らふものゆゑ、けがれあるものなり、されば、以後は、扇子を以つて消すやうにせよと言はれたり、一休はおそれ入つて、いかにも口にはもろ／＼の不淨を喰らふゆゑけがれて居る、そのいきを吹きかけるは、濟まぬことなり、いかに

八 生て居るか死んで居るか

も以後は氣をつけまするとて、その夜はそれにて事すめり、あくる朝となり、いつもの如く本堂にて朝のおつとめ始まり、然るに常に禪師のかたはらにありて、讀經して居る一休は、その朝にかぎり、はるかうしろの方にありて、特に本尊に脊を向け、讀經して居り、おつとめおはりし後、禪師は一休にむかはれ、何故にうしろむきとなりて、讀經し居りしぞと問はるれば、一休はまじめとなり、口はもろ／＼の不淨を喰らふゆゑ、けがれた口にて讀經するは、佛に對しておそれあり、故にうしろむきになりて讀經せりと答へられたりといふ、

一休の利根なること、目より鼻へぬけるばかりなるより、ある頓智

にとめる旦那、一つお小僧をこまらしてやらんと、ある日のこと、一羽の雀を手に握りもち、大徳寺に一体を訪ふて、これお小僧よこの雀は、生きてゐるか死んでゐるか、あて、御覽といへば、一体は戸口にはしり出で、敷居をふみまたぎて、我は今出づるのか入るのか、先づこれを言ひあてられよと言へば、かの旦那もかなはぬかなはぬと言ひながら逃げ去りしと云ふ、

九 ふたを取らずに喰へ

ある旦那は一体のあまりにかしこきを見、これをためさんとして、養叟禪師をおとぎに招ねぎ、かならず一体をおともにめしつれられよとたのみ、禪師の一体とともにまゐられしより、茶室に請じてお茶を供し、いろ／＼のおはなしのありしうち、時分もよければとて

膳部をいだされける、一体も禪師と共に、ふたをとりてまゐらんとすれば、旦那はお小僧よ、ふたを取らずに召しあがれといへば、一体唯と云ふてそのまゝ箸をおさめ、いと平然としてひかへ居れば、旦那は得意満面にて、いかなるお小僧も、これには閉口せしならんと、心にうちよろこびゐたるが、禪師にむかひ、汗も定めし冷えいはん、おかへありて如何にいぞと言ひながら、一体にも亦、汁をかへられてはと言へば、一体は氣の毒さうに、さらば取りかへてたまはれ、されどこのふたを取らずに、中味をおとりかへ下されよと、たちまちかたきをうたれしなり、

一〇 雲にかくれて

ある日大徳寺の玄關に、商人風の男見へ、一つの大きなかゝみ餅を

取り出し、和尚さまにあげて下されとてかへれり、取りつぎに出で
たる一休、この餅を見ると急に喰いたくなれり、こゝにおいてそつ
と其のかたはしのところをかき取り、ふところに入れてかぢらんと
して居るところへ、師の坊はおかへりになれり、一休はかゝみ餅を
持ち出し、禪師にお目にかけてしに、禪師はその餅の缺けて居るを見
られ、満月は無邊のものなるにと仰せらるれば、一休はすかさず、
雲がくれしてこゝにましますとて、懐よりとり出したるといふ、

一一 皮袴

一休和尚は、いとけなき時より、常の人にはかはりたまいて、利根
發明なりけるとかや、師の坊をば、養叟和尚と申しける、こたび且
那ありて、常に來りて和尚に參學などしはべりては、一休の發明な

るを心地よく思ひて、折々はたはむれをいひて、問答などしけり、
或る時かの旦那皮ばかまを着て來りけるを、一休門外にてちらりと
見、内へはしり入りて、へぎにかきつけ立てられけるは、

この寺の内へ、かわのたぐひ固く禁制なり、もし皮の物入ると
きは、その身に必らずばちあたるべし、

とかきて置かれけり、かの旦那これを見て、皮のたぐひにばちあた
るならば、このお寺の太鼓は、何としたまうぞと申しける、一休さ
ゝたまひ、さればとよ、よる、ひる三度づゝ、ばちあたる間、其方
へも太鼓のばらをあて申さん、皮のはかまきられけるほどにと、お
どけられけり、

一一 此のはしわたるこそかたく禁制なり

その後かの旦那、養叟和尚をときによぶとて、一休もおともに申し、かの返報せばやとたくみけるが、入口の門の前に、橋ある家なりければ、橋のつめに、高札をかなにてかき立てける、

このはしわたること、かたくきんせいなり、
とかきつけたり、養叟ときの時分よしとて、一休をめしつれ、かの人の方へおんいであるに、橋の札を御覽じて、このはしわたらでは内へ入る道なし、一休いかにとありければ、一休申さるゝは、いやこのはしわたる事と、かなにて仕つりたる間、まん中をおわたりあれとて、真中をうちわたり、内へ入りたまへば、かのものいであひきんせいの札を見ながら、いかではしわたりたまふごととがめければ、いや、我等はしはわたらず、真中をわたりけると仰せありければ、亭主も口をとちけりとなん、

一三 黒ごろも

亭主は、残念におもひ、一休に問ふて曰く、凡そ沙門のかたちといつば、んにくに二体の衣をき、ざいしやうざんげの袈裟をかけてこそ、僧とは申すべけれ、いかに小僧なりとて、俗衣のおいでたち、心得がたくと申せば、一休おさなけれども、歌一首よみて、こたへられける、

きて来たぞ、本来空の、くろごろも、

袖ながからで、人こそは知らぬ、

とはべりたまへば、旦那も養叟も、手をうち、口をあいて、ふさぎかねられけるとなり、

一四 鎌倉街道

さておん齋を出しけるが、今一度不審せばやと思ひ、一休にはわざと、魚類の膳をすゑけり、めづらしくやおぼしけん、ひたもの食ひたまふ、時に旦那、人しれぬ衣めしたる御僧の、したゝか魚をまるることよと、たはむれければ、一休きゝたまひて、口は鎌倉街道なれば、貴きもゆき、いやしきも過ぐとのたまへば、かゝるものもとほりいべきかとして、刀をすりとぬかれける、一休すこしもさわがす、敵か味方かと問ふ、敵なりといふ、しからは通すことならず、味方なりといへば、けへんくとのたまひて、くせものが通るとて只今にはかに、せきがおはりたるはといひたまへば、旦那も和尚もこのお小僧の口には、かたれまじとて、言葉なく、舌の根をふるひ

てやみぬ、

一五 からざけ

一休和尚は十二三の時、師の坊につかひて、物よみ、手ならひなどしておはせしに、をりから夜さむの頃なれば、師の坊からざけをあつものとして、只一人まゐりて、一休へは豆腐やうのものまゐらせけるに、一休これを見て、凡そ出家は、なまぐさものを喰はざる由うけたまはりしが、和尚はからざけをまゐるよ、くるしからずば、われらもたべんと申されける、師の坊おかしくおぼしめし、汝はかやうなる小僧の身として、なまぐさものの食ふときは、たちまちばちあたるなりとおほせられければ、一休まゆをひそめて、しばらく思案して申さるゝは、おなし人間の身として、小僧にのみばちあたら

んや、老僧こそなまぐさのまゐらば、ばちはあたるべけれど、あざわらひておはしければ、師の坊のたまふは、いとけなき身として、心たけたるいひやうかな、さればよ、老僧とおんゆるしはなけれども、我等は引導をして食ふなりといひたまへば、その引導はいかなることやらん、少しうけたまはりたしと申されければ、さてくわごせは、小しやくなる人や、いで、いんどうしてきかせんとて、一杯もりたるからざけをさへげて、箸おつとりのべて、のたまはく、

汝元來かれきの如し、たすけんとすれどもいきて水中に歸らん
 ことかたし、愚僧に服せられて、佛果を得よ、喝、
 とのたまひて、ひたものまゐりける、

一六 鯉

一休は、師の坊の引導わたさるゝをつくゝとき、まゆをひそめて思案しておはせしが、夜のあるをまちかねて、いそぎ魚の店へはしり行きて、したゝかなる鯉を一こん買ひとり來りて、味噌汁をこしらへ、かの鯉をひんにぎり、菜刀おつとりのべて、細くび宙にうちおとさんとせられける所へ、師の坊立ちいで御らんじて、これは沙汰のかぎりなり、昨夜もしめしおしへし如くに、いとけなき小僧の身としては、からざけたにも無用といひしに、其のいきてはたらくものをば、害してくらはんこと勿体なしといましたまふ、一休すこしもさわがず、われにもいんどうおはしますとて、さあらぬ體にておはしける、師の坊もあきれはて、大いにわらひて、それは

いかなる引導ぞや、もししからばゆるすべし、しからずんばのがす
まじとて、かのお家の一棒をこわきにかいこんで、いんどういかに
とせめられける、一休すこしもさわがず、いでいんどう仕つらんと
て、左には鯉のほそくびひんにぎり、右には菜刀をしやにかまへて
曰く、

汝元來生木の如し、助けんとすればにげんとす、生きて水中に
かへらんよりは、しかず愚僧が糞となれ、喝、

とて、鯉のほそくび水もたまらず、うちおとし、ぐづくと煮たて
ゝしたゝか食ひてぞ、うそぶいて、おはしければ師の坊これをきゝ
さてもよき引導ぶりにて、手のはりなる心得かな、昨夜のわれらが
いんどうにては、からざけが佛果を得ずしてくそとなるべし、汝が
こひは糞とはならず、佛果を得たり、さてく活機なる人や、禪僧

なるぞや小僧どのとて、かの一棒をからりとすて、舌をふるひての
たまひけるは、三年になる鼠を、今年生れの猫がとるとは、かゝる
ことかや、兎角汝はたいものにはあらじと、かんじたまひけるが、
案の如く、程なく天下老和尚と、自からいへる程の活禪師にて、一
休とて名を千歳につたひたまひて、田をかへす老爺、のりをするあ
ままでも、人にもてはやされたまふこと、たい人にてはましまさ
るなり、

一七

一やすみ

一休和尚は、おん諱を宗純と申せしが、別號を一休となづけたまひ
けるに、或る人きたりて、一休となづけたまふ心は、如何なるお心
得にてはべると尋ねければ、よくこそ尋ねめされける、あながち一

休きに、深かき心こころもあらざれば、かたりきかすべきやうもなし、きいた
まへとてよまれけるは、

有う漏ろう路ろより、無む漏ろう路ろへかへる、一ひと休とまり、

雨あめふらばふれ、風かぜふけばふけ、

とあそばしければ、かのものきいて、さてもおもしろ相あひまなるお歌うたや、
うろ、むろとは、如何いかなることにておはしけるぞとたづねければ、
おそばなる拂ほつ子すをとりて、かのもの、顔かほをなでたまへば、目めかほし
かめてうつぶしける、一ひと休とまり拂ほつ子すをひき、合あ點てんかとのたまへば、いや
何なに事ごとかなざるゝと、おどろきたるばかりにて、何なにとも心得こころえすと申ます
その何なにとも心得こころえぬところが、無む漏ろう路ろなり、はつとおどろく所ところがうろ
ちなりと仰おほせられければ、かの俗ぞく肝かんに銘めいじてありがたや、即すなは時じに大だい
事じをさづかりけるよとよろこびて、さておうたの一ひと休とまりみとは、心得こころえ

申ませり、雨あめふらばふれ、風かぜふがばふけとは、いかなるお心こころにてはべ
りけるぞ、さればよ、わづかの道みちのことなれば、雨あめも風かぜもいとふこ
とはべらすと、仰おほせられければ、さてもありがたきお歌うたや、おそれ
ながら、只ただ今いまさづかり申ませし心こころを、一ひと首しゆ申まして見みんと申まされければ
それは奇あま特とくなる心こころざしやとのたまへば、かの俗ぞくは、

うろちむろち、ひとやすみぞと、きく時ときは、

十じゅう万まん億いっ士し、すぐさきと知る、

と仕つかつりければ、一ひと休とまりきこしめし、善ぜん哉さいくとして、尻しりもちついでよ
ろこびたまいける、

一八 四休居士

かの俗ぞく人じんのよめる一首しゆに、尻しりもちついでよろこばれたる一ひと休とまりは、彼か

の俗人ぞくじんにむかはれ、かゝるためしは、もろこしにもはべりしことなり、四休居士しきうこじといふ人ありけるに、山谷さんこくといふ人、その四休の心を

とひければ、四休笑ひて答へて曰く、

庵茶淡飯飽即休あんでんはんあけはらすなはらきやす 補破遮寒暖即休ほはしやかんだんあはれはらすなはらきやす

三平二滿過即休さんぺいなんまんすぐればすなはらきやす 不貪不妬老即休ぶとんぶたおれはらすなはらきやす

と申されければ、山谷が曰く、これ安樂あんらくの法なり、それ欲すくなきときは、不伐の家なり、足ることを知るは極樂ごくらくの國なりとかんじてしたしくかたりて、四休の心を詩三首につりて、うたひたのしみしとかや、その一首に曰く、

富貴何時潤二鬪體ふうきいつれのとときうるはすくろを 守錢奴與二抱官囚しゆせんどのとほうくわんしゆ

大醫診得人間病たいいしんえたりにんげんのかやまひ 安樂延年萬事不足あんらくえんねんばんじふそく

とはべりしによく似たり、一休の心をとひて、今其方の歌よむこと

よとかんじたまへば、彼の人申すやう、一休の二字をたづねて、四休の四字をすること、まことに求めずして得るを幸ひと註せしとかや、

一九 三平二滿

彼の俗人ことばをあらため、かの四休のうち、三平二滿とは、いかなることやらんと問ひ奉れば、其方の内方よとのたまふも、合點がてんまゐらず、見にくきといふ心かといふ、いや左にあらす、おごせのことなりとのたまへば、さてもめづらしきことかな、誠に三平は兩の頬ほに、鼻はな、二滿は、ひたへとおとがいよ、おもしろき故字や、さりながら、女どもにきかせば、一休様をつめり申すべしと、わらひてかへりける。

二〇

蝮川新左衛門親當

一休和尚の時代に、蝮川新左衛門親當といふ人ありけるが、禪法に身をやつし、心をなやましけるとなり、一休の發明なることをきき及びて、道師とたのみ奉つるべしとて、ある時一休の庵室に尋ね行きて、柴のとぼそをほとくとたたく、折節一休いでたまひて、いかなる人ぞといひたまへば、いや、くるしうもいはす、禪法修行の大俗まゐつていと申されければ、一休はや問ひたまほく、

汝はいづくの人ぞ、

答へて曰く、和尚と同國、

國には何もはべらぬが、

鴉はかあ〜、雀はちう〜、

こゝはいづくとかしる、

紫に染めたる野邊、

いかんとしてか染めけるや、

尾花槿紅菊紫蘭、

ちりての後いかん、

宮城野が原、

原には何のはべる、

水は流れて沈々、風はふいて颯々。

善哉、これへ〜と請じ、茶をまゐれとて、一首をよめる、

何をがな、まゐらせたくは、思へども、

だるま宗には、一物もなし、

一休

親當の返歌、

一物も、なきをたまはる、心こそ、

本來空の、妙味なりけり、

親當

と申されければ、一休のたまひけるは、き、及びしより、蜷川殿は

道心者なりとて、感ぜられける、

さて四方八方のものがたりすぎて、親當申されけるは、少し承はり

たきことあり、邪正一如といふ心得は、いかなるがよきはべるにや

一休き、たまひて、わごせは、歌すきなれば、一々答へはべらんき

、たまへとて、邪正一如の心を、

生れては、死ぬるなりけり、おしなべて、

釋迦も達磨も、猫も杓子も、

又問ふ、空即是色とは、いかに、

こたへて曰く、

白つゆの、おのがすがたは、そのまゝに、

もみちにおけば、紅の玉、

又問ふ、色即是空の心は、前のうたをかへして見べきや、

答へて曰く、

花を見よ、いろかも共に、ちりはて、

心なくても、はるは來にけり、

又問ふ、佛法とは、いかなる心をよしとしはべるや、

答へて曰く、

佛法は、なべのさかやき、石のひげ、

繪にかく竹の、友すれのこそ、

又問ふ、世法はいかに、

こたへて曰く、

よの中は、食ふてはこして、ねておきて、

さてそののちは、死ぬるばかりよ、

と一々問ふことばのもとに、歌よみてこたへられければ、親當舌を
ふるはして、きゝ及びしよりたけき御僧かなと、頼もしく思へけれ
ば、道をしめしたまはれ、いつまでかたるとも、はまのまさこの數
々なれば、まづおいとま申すとて、しをりがきのほとりまでかへり
けるが、手をはたとうち、立ちかへりて、一大事のあんじわすれた
り、佛には、いかゝしてなりけるぞと申されければ、一休、きやつ
はくせものかなとおぼしめし、それは、いとやすきことなりとて、
ふんぞりかへりて、目口をひろげてかくして、佛にはなるよとのた
まへば、親當おどろき、活大禪師かなと、心空及第してこそかへり
けれ、

二二 左近尉

一休和尚、奈良のたきといふ所に、おりくはおはしける、その
邊の村々は、近衛殿の御領地にてありけるが、左近尉といふ家老、
百姓をひたものせぶりとりに、百姓どもこれをなげき、いかゞ
はせんとひしめきあへり、その中の老人申しけるは、いかに百姓の
あたりまづしとて、武家とははるか違ふべし、御公家の長袖なれ
ば、訴へ申して見んとて、訴状をたゝみける所へ、折ふし一休鉢を
ひらきにいだたまふ、百姓共一休を請じ、この訴状おんかき下され
よとたのみければ、やすきことなり、いかなる事ぞやとのたまへば
しかくのことにてはべると申しければ、長々しき状までもいるべ
からず、これをもちて、近衛殿へさゝげよとて、歌よみてつかはし

たまふ、即ち

世の中は、月に村雲、花に風、

近衛殿には、左近なりけり、

とよみて、之れをつかはされければ、村々の百姓、かゝる事にては免多くたまはること思ひもよらずと申しければ、一休ひたすら、このうたのみさゝげよと仰せられてかへりたまへば、おの／＼せんざしけれども、本より土のつきたる男どもなりければ、一筆よみかくことならざれば、せひなくかの歌をさゝげり、近衛殿御覽じて、こは、いかなる人のしけると仰せ出されける、百姓申しけるは、たき木の一休のお作にていと申せば、あのおどけものならでは、かゝる事言はん人、今世には覺えずと與じたまひて、多くの免を下されけるとなり、

二三 關の地藏

關の地藏をはじめてつくりし時、所の人々よりあひ、この開眼をばいかなる御僧にか頼み申すべきと、皆々口々に評定しけるに、その中の一人申しけるは、我等こたび、都一見仕つたりし時、京わらんべのいひしは、今の世には、紫野の一休にまさる僧はあらじと申しける、いざやこれほどの地藏をこしらへ、よの常の僧にたのまんより、一休和尚を請じ申すべしといひければ、おの／＼しかるべしとて、はや都の紫野へといそぎける、折ふし一休寺に御座ありけるせきものごもお禮申すよしを、くはしく申しあぐる、一休のたまひけるは、幸ひ關東修行にいづるなれば、立ちよりてかいげんしてまゐらせんと仰せ下さるゝ、里人よろこび、はしりかへり、一休こ

そお下りなれとて、上を下へともてかへし、道のちりをとり、あた
 まを棒につき、きびすをぼんのかばにつけて、お迎ひにいでけるに
 一休たひひとり、すごくときたりたまふ、皆々よろこび、先づお
 禮を申す、一休かの地藏はとのたまへば、さしも結構なる地藏をつ
 くり、供物をそなへ、香花を手むけ、しやうごんおこたらすぞ見へ
 ける、さて開眼してたまはれとて、一休を請じて、いかなることや
 あるやらんと、われもくのびあがり、おしあひつまづきなごして
 見るところに、一休つかくとはしり寄り、彼の地藏のあたまから
 小便をしかけたまふこと、盧山のたきの如し、種々の供物もうみに
 なり、流るゝばかりしかけて、開眼はこれまでなりと、あづまをさ
 して急がれる、所の人々これを見て、あら勿体なおんことや、
 けうがる瘦法師の物ぐるひをつれ來り、かゝる大事の菩薩に小便し

かけさせることの腹立たしさよ、かの法師めのがすなと、我もく
 とはがみして、おつかけゝるが、尼入道はよりあひて、あら勿体な
 や、一休坊主めがしけることはとのしりて、清水をすくゐ來りて
 彼の地藏にそゝぎかけて、小便をあらひおとして、又供物をしなを
 し、ゆるしたまへと禮をなしけるが、かのおつかけたる若ものも、
 道にたふれ、かの小便あらひしものどもも、わなゝぎふるひ、狂亂
 して口ばしりけるは、天下の老和尚、一休の開眼なされしを、何と
 てあらひおとしけるぞと、みなく物につかれし如くなりければ、
 妻子眷族おどろきて、やれあの一休和尚をおつかけて、今一度開眼
 をたのみ奉つれと、われもくとおつかけゝるに、桑名の渡舟にの
 りたまふところにて、おつつきけるが、かの段くわしく申しければ
 それはふびんのことなれども、是よりかへるに及ばずとて、布下帯

の八百年ばかりにもならんとおぼしきをとりだし、これにて地藏の首をくゝりておけ、忽ちにやまひは治すべしとのたまへば、かのものども、勿体なしとは思へども、前の奇特におそれ、おづくおそれ申して、いそぎ關東へかへりければ、一休は關東へいそぎたまふ、
さて里人かへり、仰せの如く、おづく地藏の首に、かの古したおびを纏ふとひとしく、みなくものけのきしかば、さても名譽のおんことなりとて、其のしたおびを得はづさやりける程に、一休のおのぼりの時、又立ちよりたまひて、かの首の下おびをはづして、かねの緒にかけて、都へのぼられける、それよりして、今の世の佛神の、かねの緒を下おびの丈にくらべ、六尺に定めけるとなり、ふしぎのことどもなり、

一三三 戀の病

一休、一大事因縁の御工夫なされし時、諸旦那あるひはお伴たち衆毎日とふらひ來りて、さまたげとなりければ、かしましくおぼしめして、お心地あしゝとて、一圓人々にいであひたまはず、みな心もとなくて、折々におん見まひ申しはべれば、お長髪茫茫としたまひて、何とも色みえず、おなやみのみ仰せられける、旦那をさきとし、御知音の衆もよりあひ、之れはきづかはしきことなりとて、時の名醫を入れかへく、かけまゐらせて、おんいたはりはいかにとさけば、くすし申されけるは、お脈はいかにもよし、不審なるおんわづらひと、どれもくも申しければ、ある時旦那、知音の衆よりあつまり、このおんなやみの様子は、いか様濕熱のおんなやみとは

見へず、若き御僧のことなれば、もしや戀などをばなされて、かく思ひわづらひたまふこともやあらんと、一人申しければ、おのゝこの義尤もしかるべし、とやせんかくやあらんと、口に申されけるが、いやゝゝ、人多く知りたりと思し召さば、あかしたまはぬこともやはべらん、ひそかによりき仲の知音のみ、二三人見まひて、そとうかひひはべらば、誰となざしあるべし、しからは誰人にもあれ此のものどもがかゝりなば、なか御本意をとげられぬことのあるべきと、たのもしくいひ合はせて、ひそかに三人まゐりたり、一休いであひ、四方八方のものがたりすまして、一人申し出でけるは、この間さまゝの御療治にても、お脈は常にことならずと、醫師おのゝ申すなり、平生とも違ひて、何とて心深くわたらせ給ふぞや定めて戀と見つけはべると、見つけ申せしはひがめか、ありのまゝ

に仰せられよ、叶へてまゐらせんと、うちつけて申しける、一休いかにもうれしげなるおんかほばせにて、この上は何をかさのみかくすべき、この日來こひわびて、さてかくの如くやつれはてゝいなりよくこそ仰せ出だされたり、何とやらんわれらには、似あはぬことにてはべれども、おのゝは日ごろのよしみなれば、ひとへにさたなくちかへてたべ、ことによるものならなくに、心みだれてはづかしや、それぞと名をば面上にてはのべがたし、一筆かきてまゐらすべし、門外にいでたまひて、おのゝひらき御覽じて、いそぎかなへてたまはれ、我が命はながらへて、おのゝにはそのかはり、よき道教へ申さんとて、おのゝの間へすんといり、ひとふでさらりとかきて引きむすび、かの三人に渡したまふ、三人よろこび、お心やすくおぼしめせとて、まかり出で、門外へはしりいで、さてこそ申さ

ぬことかとして、いそぎ其の名のしらまほしくて、かのかみひらきて見れば、おん歌なり。

本来の、面目坊が、立姿、

一目見しより、戀とこそなれ、

我のみか、釋迦も達磨も、阿羅漢も、

この君ゆるぞ、身をやつしける、

とかゝれたり、三人のものども案に相違して、横手をはたとうち、ひごろのお心もしらぬ身か、あらぬわざを思ひけるにぞ、おかしけれ、今にはじめぬおんごうけに、たばかさされるこそおろかなれ、まことにありがたきお僧かな、繪にうつし、木に刻めるは多けれどわたもちの釋迦如來なりけりと、拜まぬものこそなかりけれ、

二四 蛸

一休和尚は、蛸が御好物にて、ある日のつれづれに、蛸をかひにつかはされけるに、折ふし店にきれて、かのつかひのもの、こゝかしことたづねて、おそくかへりければ、待ちわびたまひて、一首はべりける、

このたびは、急ぐと云ふに、汝が袖の、

たこの入道、道のおそさよ、

とあそばしけるところへ、蛸四五杯買ひもて來りければ、一休よることたまひて、そのたこむざく食ふもむざんのことなり、いんどうの願ふくみてはとて、

千手觀音蛸手多。斬懸二袖酢一拜二如何。

佐州一味天然別

他禁戒任老釋迦

やれ引道はすみけるぞ、火葬にすべきか、土葬にせんか、いやく
 水葬にせよとて、手とり足とり、手にく沐浴させて、袖酢をかけ
 て、ひたぐひにくひて、さる旦那方へ行きて、酒などまゐりけるが
 あまりにおほく蝟をまゐりければ、吐却なされけるに、みなく蝟
 なり、旦那衆これを見て、おどろきてかへりて申しけるは、一休和
 尚は、佛のやうに思ひしに、蝟をまゐりけるかな、なまぐさ坊や、
 これはくとおざけりわらひければ、一休すこしもさわがず、いや
 く、われ等は蝟をたべねど、口よりいづればせん方なし、さりと
 てくはぬとまつくろになりて、あらがひたまへば、口より吐き出し
 たるものを、くはぬとあらがひたまふかや、いよくきこえぬ御坊
 やと、おどろあがりてわらひければ、いでくわごせだちに、くは

ねども口よりいでたる證據を見せんとて、みなくをひきつれて、
 百万遍に行き、善導と法然の畫像を見せて、あれ見たまへ、人々よ
 善導のあみだをくひしことはなけれども、口より三尊のあみだ佛い
 でたまへば、善導大師さへ、くはねど口よりいづるあみだを制しが
 たし、まして愚僧くはねども、蝟のいづることさらにせん方なしと
 仰せられければ、みなく横手をうちて、さても頓作なる御返答や
 と、口をとちてかへりける、

二五 喰つた魚を水中に吐き出せば、游泳す

ば、游泳す

一休和尚は生佛にて、魚をまゐりて水中にはき出したまへば、その
 魚たちまちいきかへりて、もとの如くなること、洛中にてこのこと

専らなりと、或る人來りてかたりければ、一休おかしくおぼしめし
 洛中の辻々へ、高札をこそあそばしける、そのことばにいはいはく、
 來るいついのかの日、さがり松のほとり、紫野において、魚をく
 ひて、其のまゝもとの魚にはき出し、水中におよがしむることな
 り、おのぞみの方々、御見物まち奉つる、

大夫は、天下の老和尚、一休大禪師、

とぞかゝれける、洛中の諸人これを見て、うそかまことか、かくと
 は人々いひけれど、まことしからず思ひしに、さてはうたがふ所な
 し、正しく御自筆にて高札を立てらるゝ上は、しるしなくては叶ふ
 まじ、いざや人々見物して、末代のかたりものにせんとて、知るも
 知らざるも、見たも見ぬも、その日の來るを待ちかねて、門前に市
 をなし、我見もらさじと、ころぶまでのびあがりて、洛中の貴賤群

聚しけり、その刻にもなりしかば、大たらひに水を入れ、なる程魚
 をよく料理して、かのたらひのほとりにおせんぞすえける、一休出
 でたまひて、かの魚をひたぐひにくひたまひて、さてはんぎりに向
 ひて、喝々とたまひて、しばらく目などをふさぎなどしたまへば
 見物の群衆おんかほをまもり居、いきたる魚をはき出したまふかと
 今やくとまち居たるに、しばらくありてのたまひけるは、おのお
 のはるゝのおん出で、なるほどにいつもより一きわ手ぎわに吐く
 べしと、種々思案をするに、中々はかれさうにもなし、せひに及ば
 ず、糞になりとひりて捨て申さん、はやおのゝもおかへりあれと
 て、内へ入りたまふ、上下千人肝をつぶし、さてもおどけたるお坊
 と、興をさましてかへりけるが、その中に心あるものゝいひけるは
 たい今まゐりたる魚は、みな生きて淵におどるなり、ありがた

き一言かな、まことに正法に奇特なしとこそうけたまはりしに、人のあまりにふしぎなることをいひて、そしるなれば、其のことわりをしめたまふ、ありがたしありがたしとかんじければ、みな人これに氣がつきて、合點したるも合點せぬも、うなづきあひてかへりしとなり、

二六 紫野丹波近

白河のほとりにすまゐしける桑門に、名譽なる輕口の人ばかりけるが、一休のかる口なることをき、及びて、いづぞは行きて、難句をしかけて見んと、常々心がけられるが、不圖思ひあたる趣向ありければ、さらば一休へまゐりて、お知人にもなり、さて一句して見んと、はるくくと白河邊土より、紫野へとぞいそがれける、折節一

休もいほりにまし／＼て、おしる人になり、とかくなる程に、内々たくみし一句の句作も出来ければ、かの僧申されるは、承はり及びしおかる口を、何にても一句あそばせかし、何とぞつけて見はべらんと申されければ、一休仰せらるゝは、客發句に亭主わきとこそ申せ、先づ其方あそばせとありしかば、内々たくみおきしことなればさらば申して見んとて、難句をこそは出されけるが、この所は何と申すや、紫野と仰せられければ、即ち

紫野丹波近

とせられければ、いまだ息もひきいらぬに、はやつけられける、そなたはいづくの人ぞ、白河のものなりと申されければ、

白河黒谷隣

とあそばしければ、かの僧肝をつぶし、さしもむづかしき章句なり

一句のうち、二字の色字、二ツの所名、いかなる瓢箪の川流れなる
 かる口も、すこしはしぶりこぶりしたまふべしと思ひしに、貝とる
 あまならで、息もつけあへずつけたまふ、かゝる名對ある上は、は
 ちやこはしとて、そちうそふきて、尻をからげてにげられるとな
 り。

二七 畫賛

ある人畫かきの土佐守に、掛繪を一幅たのみけれど、終にかきてつ
 かはさず、彼の人心せきて、直ちに土佐守の宿へ行きて、申されけ
 るは、折ふしたいこうちたまふにはあらねど、ひるねをしてこそ居
 られけれ、かの人常にしたしくかたる中なり、又内々たのみおきし
 ことなれば、引きづりおこしかせける、土佐ねむるにたへたり、

たとへ一夜ねずとなりとも、晩にかきてまゐらせんとておきず、し
 かれども、又晩といは、明日香川のふちせと心かはりやもせん世
 の中なり、ひらにと云ふ、是非なく筆をとり、くるくるとまはして
 はけおつとり、さつとかいて、これくるとてふせりける、望みたり
 ぬとその畫をとりてかへり、ひねくりまはして見れども、何とも更
 に体なく、水をかいてその中に、一筆くるくるとしたるものあり、
 更らに見わけられず、あまりに合點ゆかざれば、土佐方へもたせつ
 かはし、何なりと問へども、我も知らずと云ふ、かゝる畫をもちて
 何かせん、引きやぶらんとおもへども、三國一出来たり、とやせん
 かくやあらましとおもひけるが、いやく、一休和尚に賛をこひて
 かけものにせんするぞと、いそぎ大徳寺へはしり行き、一休に申し
 あげけるは、この畫は、土佐守にかせしが、さらにこの水の中の

ものしれず、いかゞ御覽あると申しければ、されば、何とも見えねども、贊ののぞみならば、してとらせんと仰せられければ、かたじけなしとて贊を請ふ、一休即ち筆をとりて、

水中に物あり、その一物をとへば、かきし書工もしらず、持主もしらず、贊する我は尙ほしらず、

とあそばしければ、みる人きく人、さてもまつすぐなるお心ばせや三國一の掛物は、これなるべしといひしが、いまにおいて其のかけもの、たゞうごの手にはあらずとかや、

二八 五百羅漢の名

ある寺に、五百羅漢をつくりて、堂供養しければ、貴賤群衆の見物ありけり、法のやみて後、その寺の僧羅漢の前に、香花などとりて

居けるに、こびたる世俗二三人羅漢を見物し、他の人々は立ち去れども、このものどもはつく／＼と見居りて、さてかの僧に問ひけるは、この五百羅漢に、一々名こそおはすらん、御坊は定めて御存じあらん、うけたまはりたしと申しければ、この僧世尊の外は、一人も名を知らざりければ、何ともものは言はずして、方丈へ逃げ入りける、折りふし一休その寺に居たまひて、何事なるかととひたまへば、しか／＼と申さるゝ、一休申されるは、いらざる俗のとかめ事や、かくてげいにもならざること、たれかは、おぼえはべらん、われも知らねども、いで／＼いひてきかすべしとて、羅漢堂へすゝみいで、こなたへもの申さん、羅漢達の名のおのぞみかと仰せられければ、おそれながら、承りたしと申しける、さらば、一々問ひたまへ、先づ真中なるは、しやかむに、左なるは、かしやう、右なる

は、あなん、さてつぎはと問へば、南無さなんと、その次はといへば、すぎやどや、その次はととへば、おらこちん、一々しりたまはねば、けんげじゆにて答ひたまへば、五百らかんのことはさておき百貫らかんをとへども、何かはつまりたまはんや、かの俗ことごとくひとひて、さてもよきお覺えかなと申しければ、さもなくてひ、いにしへは一巻ばかりは、中々覺えていへどもと仰せられければ、笑ひてかへりけるとなり、されば時にとつて頓作なるお心いと、人みなかんじけるとなり、問ふても用に立たず、覺えても用に立たぬことをば、言はざるにまさる、よしなきことをすこびて問ひ、あやつられけるこそめでたし、すべてらかんのみにもあるべからず。

二九 御用心

元三は、年のはじめ、日のはじめ、日のはじめとて、一天四海の人々の、かしこきもおろかなるも、愁ひあるも愁ひなきも、貴きもいやしきも、祝ひかざることは、かはることなしと見ゆ、屠蘇白散には、どぶろくなりとも鬚につけ、おか々みすはるとて、尻餅なりともつき、それごとくにいはひまゐらせるさまは、まことにきのふにかはりたるにはあらねども、空のけしきものどやかにかすみわたり、大路のさま、松立てわたし、家にはながき代のためしちいふしめなはをひきまはし、昨日の夜半すぐるまで、人の門たゞきて、何事にか有ん、ことごとくしく足をそらにまどふ、たゞ一夜あけぬれば、これにひきかへ、心もゆるくと、又ともつもごりの來るべき心もなくて、野邊の小松に千代万代をいはひそめ、いつ死ぬべきものとはなしに、よろづの事をいみおそれ、朝のつゆに名利をむさばり、夕

の陽に子孫を愛し、蟻が茶碓をめぐるが如く、おなじことをぐるり
 くと、五百八十年七まがりといはひて、世を秋風の心は露ちりほ
 どもなき人心を、一休おかしくおぼしめし、誠におろかなるかな朝
 貌の、日かげまつ間をもさかり久しき花とながめ、かげろふの青天
 に羽をふるひてたのしむ間も世の中に、糞に箔ぬる正月とは、たゞ
 時の間の烟ともなりなんと、打ちみるより思はるゝ、いで物見せん
 人々よと、はかはらへゆきてしやれかうべをひろひ來り、竹のさき
 につらぬきて、比は正月元日の早天に、洛中の家々の門の口へによ
 こくと、かのしやれかうべをさし出だし、御用心くとてありき
 たまふ、皆人いまはしく思ふて、門さしこめて居けるより、今に正
 月三日は、門戸をとざしけるとなり、しかれば一休と見まらせて
 或る人のいひけるは、御用心とは尤も至極なり、いはひてもかざり

ても、遂には皆人かくの如し、されども世の習ひにて、かくいはひ
 よろこぶに、そのむくつきしやれかうべを、家々へ出さるゝことは
 お違ひならずやと申しければ、さればよ、われも祝ひにこのしやれ
 かうべをおのゝに見するなり、めでたしといふこと、いかゞ心得
 けるぞや、むかし天照大神、岩戸をひらきたまひしより、事おこる
 といへども、此しやれかうべより外に、めでなきものはなしとてよ
 める、

にくげなき、このしやれかうべ、あなかしこ

目出たくかしこ、これよりはなし、

とはべりたまひて、これ見よや人々、目出たるあなのみ残りしをば
 めでたしとはいふことなるぞ、皆人ごとにかくとはしるめど、きの
 ふもすぎ、今日もくれ、あすか川の淵瀬常ならぬ世とは、目には見

ぬからに、風の音にもおどろかぬ人々に用心せよと、たゞ人はこれにならねば、目出たきことはなにもなしとのたまへば、諸人これをきいて、さてもかしこきひじりとて、おがまぬ人ぞなかりける。

三〇 珍なる引導

西の國の大名身まかりけるに、いまはの時申されけるは、我死して後は、しゆくゝの佛事をつとむべからず、紫野の休禪師を請じて引導をたのみ申せ、これより外にのぞみなしとて死しける、人々なげきかなしき、さて御遺言なればとて、いそぎ都へ使者を立て、休を請じける、一休折ふし寺におはしければ、使のものにあひたまへ、やすきことなりとて、かの使者をうちつれて下りたまふ、葬禮の日限きはまりしかば、音にきゝし紫野の休和尚こそ、この國の

なにがしに、御引導のためとて御下向ありしと云ふことなれ、國々島々より、きく程の人足をそらにして、貴賤くんじゆし、一休のいんどうを聴聞せんとぞひしめきける、葬禮の儀式、天には花をふらし、地には錦をしき、ことばにもものべがたく、結構をつくしたり、その日になれば、數万の見物、かの一休の導師をぞきくべけれど、押あひへしあひしけるとなり、さて玉のこしをかきす忍ければ、一休立ちいでたまひて、籠の前に一もくしたまふ、諸人今や〜と耳をそばだて居るに、一言をいひたまはず、天を見て口をひらき、地を見て口をふさぎ、さつとひきて見たまふのみなれば、かの大名の御臺、公達をはじめ、一門家來の人々、これは如何なるおん事やらん、せめては一句をしめしたまはれと、御衣の袖にすがりつゝ、乞ふて止まざるのみならず、諸人の見物も興をさましければ、一首

のうたをよみて、都をさして上りたまふ、人々是非なく、そのお歌を見れば、

我はたゞ、後世の教を、しらぬなり、

あうんの二字の、あるにまかせて、

とありしかば、皆人これをきゝて、あともうんとも言はれざる御僧かなと感じあへりしといひ傳ふ、

三三 善導と法然の畫像の讚

一休和尚は、天下の活僧なりしとて、諸宗もおしなべてたつとびける程なれば、いづれの上人長老も、あがめたまはずといふことなしある時一休黒谷におまわりありしに、寺中の人々一休を見たてまつりて、申しけるは、今の世に、活佛と人ごとにいへるは、この禪師

なり、よき折からなれば、いざや當時にはべる善導、法然の畫像に讚をたのみ申し、かの念佛無間とてあざける、日蓮宗に見せて、禪宗の佛心宗だに、かく此方の祖師は貴びたまふと、高言にせばや、かるきお僧なれば、定めて讚したまふべしと申しければ、おのゝこの儀然るべしと相議して、やがて一休を方丈へ請じ申し、件の畫像をとりいだし、資をたのみたてまつる由申しければ、案の如くやすきことなりとのたまふ、即ち硯と畫像をおん前に出しければ、さらりとひらき一覽あり、筆おつとりたまひて、先づ善導大師に賛して曰く、

末法出現名善導。 則是彌陀化身也。

濁世末代導惡人。 一切衆生易往生。

法然上人には、

傳聞法然生如來。安座蓮華上品臺。
尼入道同二愚痴輩。一枚起請最奇哉。

と、即時にあそばしければ、さてこそとて、おのゝ大いによるこ
びはべりて、この兩佛に、淨土宗として斯く贊をいたさば、家のこ
となれば、手ばめにしたるとて、又日蓮宗があざけるべきに、かゝ
るうれしきことこそなけれとて、かの贊を日蓮宗に見せて、大いに
威言をぞ申しける、

三三一 日蓮の畫讚

この頃は、ことに淨土宗と日蓮宗とは、仲あしくして、犬のいがむ
が如く、たがひにまなこをいからしてにらみあひければ、日蓮宗の
この贊を見しものども、大いにはらを立て、一休をそねみにくみけ

るが、その中の一人申しけるは、いや、一休のお心は、ものに
かざりなく、すなほなる御事なり、いざや日蓮大聖人の像をかゝせ
贊をこひて見ん、あれほどの褒美はあるべしと申しければ、もつと
も然るべしとて、いそぎふためきて畫をかゝせ、やがて一休へもち
まわり、贊をたのむ由申しければ、もとよりかるき御僧なれば、や
すき事とのたまひ、かの畫をひらき御覽じけるが、この畫はさて
も小さくかきて、うす黄なる衣をさせけるよと笑ひたまへば、人々
申しけるは、さんにい、いかに大きく結構にかゝせたく存じいへど
も、先日淨土宗法然のさんを自慢申し故、口おしくいひて、取も
のもとりあへず、先づちくりけに、かゝせてまわりい、いそぎ贊し
てたべと申せば、心得いとて、さきの法然の贊を所々なほして、

傳聞日蓮生如來。香座則是妙法臺。

尼入道同あまじふどうおなじく愚痴ちのはいに輩ばい一いっ遍題目殊勝哉べんのだいもくしゆしやうなるかな

となされ、そのおくに、

ぼうすく小ぼうす、

まめの粉こなにぬりぼうす、

とぞあそばしけるとかや、

三三三 半金色はんこんじきの善導ぜんどう大師だいし

そのころ又、やうくわん堂わんどうの住持ぢゆうぢ、黒谷くろやの讚さんの由よしをきいて、よその寺てらの狡猾せうかくなりと、浦山うらやましくおぼしめし、かほどかるき御僧おんそうなるに、何なにがなこの方かたにても讚さんをたのみ申まをさんとて、先まづ一山いっさんの人々ひとらをよびよせ、談合だんごせられければ、その中うちの一人ひとり申まをしけるは、なに〜と申まをすまでもあるまじ、先まづこの宗しゆの祖師そしなれば、當寺たうてらにつたはる半金はんこん

色じきの、善導ぜんどう大師だいしの畫像がうざうに、さんをたのまれよと申まをしければ、おのおの申まをすやう、實じつに〜、これは代々たいたい當寺たうてらの重物じゆうぶつなれば、これにましたるものはあるまじ、さらば其方そのかた使僧しそうになりいへとて、かの半金はんこん色の善導ぜんどう大師だいしの畫像がうざうをもたせ、一休いっしゆへまゐり、かの僧そう一休いっしゆに對面たいめんして申まをしけるは、黒谷くろやの讚さんの由承よしうけたまはり、あまりに浦山うらやましくいひて、これまで参まをりてい、あはれこの方かたの善導ぜんどうにも、贊さんをあそばしてたべと申まをしければ、それこそやすき御用ごようとて、かの畫ゑをひらき一覽いっらんあり立ちながら一筆いっぴつさら〜とかきたまひて、もとの如ごとくしたゝめ、かの使僧しそうにわたされければ、かたじけなしとて、つゝしんでいたゞき、いそぎやうくわん堂わんどうにかへり、しか〜の由申よしまをしければ、さてもかろき、御僧おんそうかな、本望ほんぼうは遂とげたり、先まづ一山いっさんをよびよせ、さんを拜はい見みせばやと、やがて人ひとをまはしてければ、おの〜よろこびはしり

あつまる、さてかの畫像を方丈にかけ、拜見申されければ、いかに
も大文字にて歌一首あり、

くろからん、衣のすその、黄になるは、

善導大師、はこをたるらん、

とあそばしければ、皆人どつとわらひ、興をさます人もあり、感に
たへたる人もありしが、今の世まで傳へて、天下に一幅の名物にな
りけるとかや、

三四 法力くらへ

一休泉州堺へお下りの時、淀の河瀬ぶねにのりたまひけるに、その
舟ののりあひに、山伏ありけるが、お僧は何しうぞと問ふ、一休、
われ等は禪宗なりと答へられければ、禪宗には、われ等が如き、奇

特はあらしといひける、一休申さるゝは、奇特多し、其方にも、何
にても奇特あらば、見せたまへと仰せられければ、いでわれ等が法
力にて、この舟のへさきに、不動をいのり出してお目にかけん、
一にこんがら、二にせいたかをはじめとして、手もみにもうでの
りければ、皆々のりあひのもの共、目と目を見合せ居るところに、
あんの如く、舟のへさきに忽ち不動の像、火焰をはなつてあらはれ
たり、その時山伏濫面をつくつて、おのゝおがみたまふかと申し
ければ、みな人ふしぎの思ひをなしけれども、一休は更らにふしぎ
におましまさぬ体なり、いかに禪僧、かゝる奇特は如何にしたまふ
とせびりかけて申しければ、われ等が奇特には、身より水を出して
あの火焰をはなつ不動をけして見せん、随分いのりたまへとて、か
の不動の像の火焰に、小便をしたゝかしかけたまへば、火焰はその

まゝ消へて、山伏の法力つきければ、みな人一体を禮拜して、奇異の思ひをなしけるなり、さて舟よりあがりて、陸路をうちつれ行くところに、むかひより、なるほど大い犬、山河にもひやくばかりにほえてかゝりければ、山伏申すやう、いかに御坊、さきの行くらべにこそまけたれ共、あのおそろしき犬のいかりをやめて、たゞ今これへよびよする法力をあらはさんが、お僧はいかにと申しける、一体、これいとやすきことなり、先づいのりて見たまへ、若しきたらずば我等にまかせたまへとのたまへば、山伏大い、たかの赤木の珠數をさらり〜とおしもんで、一いのりこそいのりけるが、一切犬はほえやまず、手もとへ來る念もなかりければ、たつさま、よこさまかけて、十文字に、犬ののとめよと、あびらうんけんそわかそわかといへども、犬はほえやまず、一体おかしくおぼしめし、そこ

のきたまへ、それほどのことに、あびらもうんけんも、そわかもいふることにはあらず、あの犬のいかりをやめ、たちまちこゝに來らせんと、ふところよりひるげのやきめしとりいだし、かの犬に一目見せて、ころ〜とのたまへば、さしもいかれる犬なれど、やきめし一目見てしより、くん〜と尾をふりてきたりければ、山伏もきもを消す、皆人さても各別なる心得かなと、感に耐へてぞわかれけるとなり。

三五 女を水葬にす

なにがしとかやいひける人の奥方、相はてられけるに、いまはの時のいひおきに、我等この年まで、佛をも法をも知らずして、かくなりはつるなり、特に女は罪ふかき由、末の世いと心もとなし、承は

り及びしむらさき野の一体は、今の世の達磨殿とやらんいひ居るよしなれば、われらがいんどうをば、たのみ奉つりて得させよと、ねんごろにいひをきしかば、夫や子はなくく、一体へ参りて、そのよしをかくくと申しあげれば、その年まで佛をも法をも知らずば、大かたのことにては、うかみかたかるべし、すなはちわれ等が一句を授けて、すくふべきなり、水葬にせん間、鴨川へつけゆけて、そのまゝ座を立ち、うちつれて川のほとりになりしかば、その死人を出せよとて、その死人を出させ、その首になはをつけ、ひきかたげて川岸に立ち、のたまはく、

川舟を、とめてあふせのなまくら、

うき世のゆめを見ならはしの、

おどろかぬ身のはかなさよ、

とて、川へざんぶりなげすて、はやかへりたまひける、人々おどろきて、お氣もそいろなるが、この一句は口づからうたひたまふなり、かゝることにてはうかびがたしと、かの死骸を引き上げ、ねんごろにおさめて、ある寺の上人にいんどうたのみければ、その宵より、かの夫も子ども、さんくゝにわなゝぎふるひて、ゆめ見けるは、一体の御引導にて、浮みしものを、よしなや上人の引導にて、引きもどされて中宇のたびに迷ふよ、又一体をたのみて、われをすくはせたまはずば、夫子もともにとりころし、手に手とりて三途の川を渡らんと、まざくとゆめまぼろしに見えければ、これはとおどろき、一体へまゐりて、その由をしかくと申しあげれば、われよい引導せしに、又異人をたのみし故なりとて、ふたゝびかへりみたまはねば、親しきもの共さまくゝになげきしかば、さてもふ

びんのことやとて、うづめし死骸をほりいださせ、又鴨川へかたげ行き、川ぎしにたちたまひて、一首をよみたまふ、

大水の、さきに流るゝ、とちがらも、

身をすてゝこそ、うかぶせもあれ、

とて、がばと死骸を川へなげてかへられければ、その宵親子のゆめに、ありがたき御いんどうにて、今こそうかびけるぞとて、白雲にうちのりて、西の空にゆきければ、見る人ありがたくおぼえけるとなり、

三六 大きくしてよめやすき文字

一休和尚山婆の謠を作りたまひし時、比叡山中よき人おはしければ、談合にのぼりてのたまふは、佛あれば衆生あり、衆生あれば山

婆もありといたしける、この次いかはせんとのたまへば、かの人もさすがの人にて、さだめて柳はみどりとなされつらんとありげれば、さてもよく推したまふものかな、柳はみどり花はくれなるの色々、さて人間にあそぶことゝのたまへば、さこそといひて、興せられし、まことに同氣相もとむるなかの志、いとほづかしく思はれる、さてよきついでなりとて、叡山の堂社をおがみめぐりたまひしに、山法師どもこれをきゝて、一休はかくれなき、能書なり、何にてもかきてももらはんとて、手にく硯紙をもち來りて、たのしみしかば、一休おぼしけるは、聖道のあて字とかや、定めて文盲なる法師どもならん、何がなかきてとらせんと、いかにもよみがたき一句を、さらく一筆にかきちらしてつかはされければ、一山の僧よりあつまり、かゝる能書の名僧、この山にきたることは、後の世

までも寶ものともなるべき語を、かゝせおくべしとて、その中の老僧のいへるは、もとよりおのゝかいてもらひけるは、一字もよめず、又語もあまりに短かくて、この山のたからとはなりがたし、いかにも大文字をかいてたべ、よみがたきはありてもせんなし、いかにもよみやすき事をたのみ奉つると、一山ともに望れければ、一休のたまひけるは、紙筆はひか、中々、いにしへ大師のあそばしける七八尺の大筆あり、紙は何ほどにもつぎ申すべしと申されければさらば紙をつがせたまへ、おのぞみの通り、ながくと大文字をかきて、よくよめるを仕つるべし、いそぎ紙をつがせたまへとありければ、何程なりと、紙はお望み次第とて、ひたものながくつぐ程にえい山の金堂の前より、坂本の人家まで、長々しくも紙をつぎければ、さらば筆をそめんとて、すみをたつぷりとふくませて、へたと

紙へかきつけて、一さんがけに不動坂まで一すちにひかれて、よめるか法師だちとのたまへば、いや、何ともよめすと云ふ、又すみを つぎて、不動坂より坂下まで、一すちにはしりひきにひきて、よめるか、よめるかとおめきたまへば、一山の法師だち、肝をつぶし、いや、なにともよめずといへば、これはいろはのあさきのくだりにある、しの字なり、ながくとかきて、よめやすきは、これなりとのたまへば、皆人興をさまし、さても、聞きおよびしより、おどけ人かなと、一度にどつとわらひて、興じけるとなり、今の世までも、そのしの字、叡山のたから物となりて有りけるとなり、山法師だちも、のぞみしことなれば、いやとはいはれぬ御作意と、みな感じけるとなり、

三七

靈照女の畫讚

ある人、牧溪和尚のお筆なりし、靈照女の繪を持ちけるが、一休和尚の活機あることをきいて、賛をたのみ申すべしとて、やがて一休へもちてまゐり、しかくのよしたのみ申しければ、それこそやすきことなれ、のぞみならば賛してまゐらせんと、筆おつとりたまひさらくと一筆かき、かのものに渡されければ、ありがたしといたきて、さてもかろきお僧かなとよろこび、内へかへり、友だちどもをよびよせ、日來の繪に、一休のさんなされしとかたりければ、おのゝ拜見申さんとて、やがて床にかけ、みなゝ拜見しければかなまじりに、

汝が親の笊づくり、馬祖に驅されて、寶を海に捨つる、阿呆

居士が娘

とあそばしければ、みな人横手をうち、さてもどうけたるおん事かな、龐居士も靈照女も、もろこしにての賢人なりと、みな人言ひつたひし程に、さだめて左様の心をもあそばさるべきかと思ひけるに各別なるおん事かな、まことに天下の活祖師にてましますと、みな人感にたへけるとなり、

三八 貧のぬすみ

一休和尚は、金を山にすて、玉を淵になぐべくもあらんおきざしなれば、もとより一錢のまうけより、かねてたくはひなかりけるに、はや大晦の暮方になりければ、一僕申すやう、明日は元三なり、何をか参らせん、八ツの木は一合もなく、青き銅は一錢もなしとなげ

きければ、一休きゝたまひて、それはなげくことにはあらず、いざ
出でよとのたまひて、一棒をふりかたげ、山家海道へ出でたまへば
折ふし瓦器うり通りければ、のがすまじとおつかけたり、かのもの
おどろき、一荷のかわらけをすて、逃げれば、さてこそとかの召
しつれし僕にもたせてこれをうりしろなし、初春を迎ひたまふが、
はからず大名はてたまひけるとて、一休を引導に請じければ、いや
まゐるまじとのたまふ、何とてお出でなきぞと申しければ、錢をく
れゝば行かんとたまふ、やすきことなり、何程か御用なるかと申
せば、一貫八文ほしといへり、やすきこと、申して奉つりければ、
その錢をもらひて後、おひはぎしたまひし所へ行きて、かわらけか
ごに錢をくゝりつけて、札を立てられけるは、先月の大晦日の夜の
土器の代、一貫八文但し一枚につき一錢づゝ帳けしたまへとかきつ

けて、傍に一句、

貧のぬすみは偷盜戒にはあらず、いかんとなれば、戀の歌も邪
淫戒にあらざる證據あり、慈鎮和尚とて、貴きひじりのよめる
歌に、

我が戀は、まつをしぐれの、染めかねて、

まくづが原に、風さはぐなり、

とはべりけるとかや、しかればとて、邪淫戒をやぶりたる人と
はいひがたし、我も貧のぬすみなれば、偷盜戒をやぶりたるとは得
いふまじきなり、

とかゝれけるとかや、さて引導にいでたまひて、曰く、

人は六道錢とて、六文いだす、汝は引導錢とて一貫八文出せり、
さつしんがいちじう、さては汝は人には一貫二文まされり、十方

に道あり、行きたい方へつツと行け、成佛正にうたがひなし、これいかんとならば、有魔地獄の沙汰も錢がするといへばなり、とのたまへば、みな人おどろきて、さてもおどけたる人やと、かんせぬ人はなかりけり、

三九 極樂は又六の門にあり

ある僧一休の活機なることをきゝつたへて、いかほどなる道徳かあるとて、大徳寺へ行きて、たづねければ、折ふし一休は、門前の酒屋が方へ行き、酒にたべよひ、前後も知らずふしたまふところへ、小僧はたづね來りて、たゞ今唐僧とかや見へて、大和尚一休はと尋ねたまふ、はや御歸寺あれと引きおこしければ、一休お目いまださめず、うかくとしておはせしに、酒屋の亭主出で、御醉眠お心

よくはべりたるかと申しければ、さてもよき氣味やとて、一首よみて亭主にとらせけるは、

ごくらくは、いづくの程と、思ひしに、

杉葉立てたる、又六が門、

とあそばしければ、亭主よろこびけるとなり、

四〇 汝が俗よ

かくてあるところへ、小僧又來りて、はやおかへりあれ、さきに申せし和尚の、お俵ちかねと申せば、こたへず、又うちかへし、高いびきかいて、ふんぞりかへりてねたまひしかば、小僧かへりて、何ほどおこしても、起きあがりたまはずと申せば、よし、そのねいりて、何とも思ひよらぬ時、ひきおこして一問かけたらば、こゝ

ろざしいよく知ればべるべしと、かの唐僧一休の臥したまふ所へ
さし足して行き、まくらもとへだうと座し、なにともしはす、ひき
すりおこして、目もいまだあきたまはぬに、一越聲をはり上げて曰
く、

西來意の祖師の話に、俗語ありや、

と問ひたまへば、そのいきもつぎあへぬに、

汝が俗よ、

とこたへて、づきこかしたまへば、かの大禪師も、舌根をふるひて
立たれけるが、さても活祖師や、きしには十倍せり、汝が俗よと
は、即時にいでまじき答話なりと、感氣きもに銘じてかへりたまひ
けるとなり、

四一 蜷川新左衛門の臨終

蜷川新左衛門親當は、その身いみじき才智發明の道士ながら、和尚
のもとへ立ち入り、禪法に参せられ、誠に佛心の妙奥をつたひ、正
法眼藏をきはめたる英雄の士なり、和尚も心通あひ合ひて、ゆゑし
くおぼしめしたるも、ことわりなり、されば定業期きたりて、寂滅
の室に入らんとするも、胎下のむかしより、これをまつこと年久し
く思ひまうけたる道なりとて、快氣の色ぞ見えにける、一門はせあ
つまり、おのゝいまはのかぎりになごりをおしみ、したひなげく
こと、よその見る目もあはれにて、知らぬ袖だにぬらしける、こと
わりとこそ見へにける、斯愁嘆の折ふし、青々たる西の空より、紫
雲たなびき、空中をおほひ、音楽きこへて異香薫々、花ふること雪

の如くなりし、妙なるかな三尊、二十五菩薩、赫々たる聖衆をひきつれ、まぢかく來迎したまへり、ふしぎなりとも中々ありがたかりける瑞相なり、うたがひもなく新左衛門は、西方十萬億土、極樂世界に往生せしめて、九品上刹の臺に至らんことは、たなごゝろを見るが如しと、おのゝ感にたへざるはなかりけり、されば落日に近き老士、まだ物なれぬ若輩のやからは、天にあふぎ地にふし、共に死なんとぞくるひける、道理の至極とぞ聞えし、その中に、嫡子は新左衛門がひざのもとによりそひ、涙を袖につゝみ乍ら、いかにあれ御覽するぞ、たのもしく思しめされて、往生安全にとげたまへとゆひをさしてをしへける、その時親當眠むれるまなこくわつと見ひらき、我が子をはたとにらんで、それ弓馬の家に生れけるものは、たとへ安養淨刹に至りて、九品蓮臺に座するとも、弓箭をわするべ

きにあらず、書院の床に立ておきたる、重簾のぬりごめに、矢をそろへてもち來るべしと云ふ、きく人おどろかざるはなかりけり、こはいかにと見るところに、親當弓勢何人ばりとは知らねども、さしもつよかるらんとおぼしきが、やがて引きあひ引きしぼり、しばしかたためて兵とはなてぼあやまたず、三体の中尊、ひかりをはなちて立ちたまふ、あみだのむないたをあなたよりこなたへ射とほしてければ、虚空に紫雲たなびき、もろゝの聖衆とおぼしきが、暫時にきえてかげもなし、いかなることぞと人して見すれば、所に久しきふるむじなの、化けたるにてぞありける、まことにけうの次第なり終に一首の辭世をつくりのこされける、

生れぬる、そのあかつきに、死にぬれば、

今日の夕は、秋風ぞふく、

とかやうにつらね、臨終をとげたまふ、奇なるかな、空寂の玄妙を
會得して、邪魔の障礙をはらひ、その身は死門に入りながら、活人
のねぶりをさまされけるは、世人の珍事とするところなり、その後
一休を導師とたのみ奉つり、御引導をこひければ、この新左衛門に
は、一かはりかはりて、引導すべしとたくみすましておはせしに、
はや新左衛門が死骸を、こしにのせて來りければ、一休たちいでた
まひて、新左衛門がのりたるがんをたゝきたまへば、死したるもの
がたからかなる聲を出して、一首のうたを一休にかけてこそふし
ぎなれ、新左衛門もたゞ人にはあらじと、今の世までも人のいひつ
たへはべるなり、そのうたに曰く、

ひとりきて、ひとりかへるも、我なるを、
道をしへんと、いふぞおかしき、

とたからかになへければ、其のことばのおはらざるに、返歌をし
たまふこそありがたけれ、

ひとり來て、ひとりかへるも、迷ひなり、

來らず去らぬ、道をしへん、

とのたまへば、新左衛門も實にもと思はれけん、その後には言もせ
ずになりけり、人みなこれをきゝて、まことに人間にてはあらず
たゞ佛菩薩のかりにあらはれ、ひとり來てひとりかへる道といへば
來らず去らぬとのたまふ、さてもありがたやと、見る人きく人、手
の皮をすりて、拜まぬものはなかりけりとなり、
老子の、死してもほろびざるものは、いのちのながしといへるは、
かゝるためしなるべし、

四一 無實の離別

新左衛門が最愛の妻は、いとけなき時よりよろづに心みちかく、たけくしかりければ、かなしきものにも慈悲のめぐみなく、めしつかふわらわにも、愛憐のなさけ薄すかりけり、されば人は似たるを友とするならひなるに、悟道の居士になれそひて、尊き教へを知らざりけることは、いか様むくひのはちなるべしと、みな人ごとにさみしける、

新左衛門あけくれふびんにおもひて、もとより道者のことなれば、たましひをください、柔和のをしへをすゝめける、しかれども露したかふけしきも見えざりけり、ある時あまりいたく制しければ、女房顔をしかめて申しけるやう、

あさ糸の、長しみぢかし、むづかしや、

うむの二つに、いつかはなれん、

と、たいかやうによみておともせず、親當おどろき、日比のふるまひに相違して、歌の心あまり殊勝なりければ、はづかしく思ひ、わがをしゆるに及ばずとて、肝にめいじて感じける、ふしぎなるかな今までは放逸邪慳に身をまかせ、まことにくらき人なりとおぼえしが、さては我よりさきに、さとりけるものをと思ひ、舌をまきけるその後、夫婦のなさけあさからず、比翼のちぎり深かりけり、上下水魚の心をなしむつびけるに、つらきものゝいひなしにてやありけん、ひそかにことつまをかさねて、ふた心ある由、まことしやかに新左衛門につげゝる、新左衛門もとより、いつはりを信するものにはあらざりけれども、實に思ひあたることありとて、物をし

のびぬをのこなりければ、しばしの延引もなく、離別してこそおくりける、女房は折ふし懷妊の心ありて、おやみければ、うらみの心あさからず、つるぎをのみ、ほのほをかうむらんともだへかなしみけれども、力なくいでにける、無實のほどぞあはれなる、しかれどもいつはり事のあとかたもなきことなれば、誠はつひにあらはれて讒言のしわざと知りにけり、新左衛門後悔して、又よびむかへんとてわがあやまりなる由言ひつかはしければ、女房返事に、
秋風の、人の心に、立つならば、

實のらぬさきに、いねといはざる、

と、かやうによみおこせて、再びかへらざりける、それより女房のなされたぐひなく、いさぎよきふるまひは、かへりてまさりけりとほめぬ人こそなかりしとなん、ある人かたりはべりて、いみじうお

もしろくかたりければ、かごみゝのそこにとゞまり、わすれもやらずありけるを、かりそめにあらはしはべる、さればかのうたに、いづれもかけうたありしとなり、きゝもらしぬることこそくちおしけれ、

四三 四十雀の引導

一休和尚の庵ちかきあたりに、四十雀を愛して、かひけるものありしが、生あるものなれば、死する期ありて、籠のうちにてむなしくなれり、朝夕手なれし可愛さに、特の外ふびんに思ひ、いとかなしく、子にわかれたる思ひをなせり、凡そ非常無心のものだにも、おのゝ佛性を具せり、まして況んや生あるものをや、死出の山、三途の川、冥土のやみはいかゝあらん、しかるべき智者をたのみて、

いんどうわたさばやと思ひ、一休のいほりにたづね行きて、しかしかの事たのみ申したき由なげきければ、折ふし和尚の弟子出であひいとやすきことなり、いでく成佛得させんとて、佛前に向はせ、足下に引導わたしける、

むかし釋尊八十三、ばつたい河においてねはんに入る、今汝四十から、紫野に成佛をとぐ、

と、たからかにこそさづけゝる、かのものたのもしく思ひ、やがてほふむりてかへりぬ、これを一休ものごしにきこしめし、たゞ今はいんどうは、よくでかしたる小僧かな、風骨によるとおぼしめし、大いによろこばせたまひ、きげんよきことなゝめならざりしとなり、

四四 蛇のひげ

むつきの末つかた、ある人和尚にともなはれ、逍遙して山野にあそび、見るにつき聞くにつき、ひたもの例のかる口を仰せられ、我もよろこび、人をも興せさせたまふ、折ふしはるかに雲井のそらを、かりがねの友をしのび、こしにかへるとおぼしくて、二羽つらなりてとびすぎける、かの人一休に申しけるは、いかに、たゞ今空をすぐるかりがねは、いづちへか下り申さん、お申しあれと申しければ和尚きこしめされ、天にかりがね一ぱい、じやのひげみすぢといへり、じやのひげはいかばかり長からん、ちやくと申されよとのたまふ、かのもの云ふべきやうはなし、さればじやのひげとやらんは、今日までまだ見たることはべらす、しらぬにいと申しける、一休し

からば、あのかりも奥州へか下りなん、筑紫へか下りなん、遂にか
りがねなど、同心して、あゆみたることはべらねば、しらぬなりと
答へたまふ、

四五 口瘡の妙薬

その比しも、都に口瘡の妙薬をおぼえて、秘藏しけるものありけり
一休奇特をきこしめし、いかにもして知らばやと思しめされ、やが
てたづねあひたまひて、しかくのお薬を知らせたまふよし、うけ
たまはり及びて、あはれこの愚僧も、御相傳をうけたく存じ、はる
くこれまでたづね参りていと申されける、かの人うけたまはり
中々の事、さる妙薬を我等代々つたへて來りいへども、一子相傳の
秘法なれば、他にもらすこと思ひもよらず、去りながら、奇特ゆゑ

しき御僧と見えたてまつれば、いなびがたくもこそいへ、ふるき御
執心にてわたらせいは、他に口傳あるまじき御起證をか、せたま
へ、しからばゆるして教へ侍らんとぞいひける、和尚きこしめされ
我が身の大事、一代一紙の誓文なれども、愚僧に教へてたゞいは
心得はべるとて、墨ぐろにこそか、れける、やがてならひ得て、庵
にかへり、あざわらひてのたまふやう、人の病ひにくすりとなるべ
きものを、秘藏してひとりおぼえたらんは、慈悲のうとき心なり、
これ等のことを秘藏とせば、おそらくは秘しても秘しがたき一大因
縁をば、如何にせん、さりながら、佛神の冥罰そらおそろし、さら
ば札をかきて知らせんとて、

一 口瘡の薬の事、もし口瘡をやむものあらば、必らず密柑の
さねをくろやきにしてのむべし、なほることすみやかにして

再びおこることなし、これ希代の妙薬なり、とかきて立てられける、教へけるものこれをき、もつての外に腹を立て、せぼねをいからして、いそぎ紫野にはしりつき、一休をたづね出し、いかに御僧は、破戒むざんの賣僧かな、何とて大事の秘薬を習ひ得て、他に口傳せまじとて、起證までかきながら、あまつさへ高札を立て、万人の目にさらすこと、いかなる曲事ぞやと、忍びかねたるそのふせい、折はたしても心得がたく、まつくろになりていかりければ、さしもの一休なれども、おめきころすかとぞ見へける、されども、おどろくけしきもなく、そらさぬかほにもてなし、あらことくしもありさまや、何事かくはのたまふらん、起證をかきしも誠なり、札を立てしもいつはりにあらず、さりながら口傳せまじとかきぬれば、口傳は一人もせざるなり、札を立てじと

かぎれば、立てたることがあやまりか、起證にすこしも背かざれば佛神の罰もおそろしからずとてそらうそふいてましくける、かのもものあくまでのしり、怒氣におかされて、方寸にせまりけるが、一言のぬけ句に返答をうばはれ、ことばもなくかへりけり、

四六 彌五郎俵

ちかき江や、かたのうらはに、彌五郎といふ船頭一人ありける、おのがわざながら、いやしきいとなみにやつれはて、一生帆のふすまかちのまくらをそばたて、まことの道にうとく、こゝろざしきながら夷狄なり、九重の花にあそぶともがらには、はるのおとりおのづからいやしきになれて、いみじかるべきことを露しらす、かたくなにして貴ときをしへをはちてやまざれば、いとあさましきよすが

なりけるが、ついに身まかりて死にける、妻子したひてなげくことかぎりなし、さてあるべきにあらざれば、火にやせん、土にやうづまんとかなしみける、せめていかなる智識をもたのみて後世のくげんをたきと思ふ折節一休風雲の行衛を追ふてうらの方にねまゐりて四方の致景をたのしみておはしますところに、妻子これを見て、衣のすそにすがり、たい今かやうのあさましきもの、相はてはが、あはれお慈悲をたれて、かのもの、後世のくるしみをみちびきてたまはりひへ、生々の厚恩にていべしとかなしみける、一休ふびんに思しめし、何よりやすきことなり、いんどうさづけ得させんとて、したまふやうこそ不審なれ、まづく死人を米麩につゝめよとて、たはらに入れてなはをかけ、舟にかきのせ、湖水のなみにうかべけるそれより沖に至りて聲をあげ、高らかにのたまふやう。

この俵はこれ、元來米俵にもあらず、豆俵にもあらず、汝は交野の彌五郎俵なり、江河に沈んでうろくづの餌となり、佛果を得よ、喝、

とのたまひ、水のそこにぞつき入れける、これ成佛の引導なり、

四七 畫像の迷惑

一休和尚とひとしき沙門ありけり、わが畫像をみづからうつし、心づから一入よく出來たるよとうれしくて、さもあれ一休に見せばやと思ひ、いそぎむらさき野へもてゆきける、和尚この繪を一目見たまひ、あな見ぐるしやとて、目をとち、大いにあざけりければ、いかなれば所存をもかへりみたまはず、かくわらひたまふぞやと、うちはらだちてのしりける、その時繪像をとりて庭上になげすて、

土草履をはきながら、さんくくにふみにじり、一筆かくぞかゝれける、

世をすて、形をすてず、鬢髪をきりてぼんのうをきらす、かりにゑざうをかきて、おのが悪業をかげおく、畫像大きな迷惑なり、

と、くろくと賛をして渡されける、沙門つくくとあんど、やがて懐中してかへりける、

四八 にごり川通り、そこぬけびし

やくの町

五月雨の、ふりつゞきて晴間も見えすうちしめり、よものけしきうるほひ、こすゑ深くすみわたる頃、つれづれさびしくおぼしめしけ

ん、柴のあみどをさしこめて、坦然としておはしましける所に、みそちあまりの男と見えて、やぶれがさをかぶり、つゞれみのを身にまとひ、車軸のあめにそばぬれつゝ、いかにも思ひあまり、うれひにしづみたるありさまにて、しづかに物申さんとうかひける、一休たぞや、こなたへとのたまひて、しばのあみどをひらききたまふかの男云ふやう、われ等はちかきわたりにはべりいものなるが、明日はさるころざしの日にあひあたりいへども、智識をたのみたてまつることかなはずいへば、おそれながら、和尚を請じたてまつりおろそかなるときを参らせあげたくと思ひ、これまでたのみに参りいなりと、思ひ入りてぞ申しける、一休きこしめし、もとより出家のいとなみに、いとやすきことなり、いづくの程ぞと問ひたまへば、おのこ答へて、さんい、我等がいへちと申すは、にごり川通

り、そこぬけびしやくの町と申して、かくれなき所にはべるなり、たづねてわたらせたまは、門邊にしるしをおくべし、かならずまぢ奉つりゆとて、いとま申してかへりける、一休あとにて、つくづくと案じたまへ、きやつは、ふしぎなるをしへやうをいひつるものかな、さらば了見して見ばやとて、やがて義理をぞひらかれける、そもくにごり川といひしは、これ今出川なるべし、そこぬけびしやくといひしは、忍かわ町といふなるべし、いでくたづねゆき見んとて、思ふあてどを問ひたまへば案にたがはず、忍かわ町といふ所にゆきあたらせたまひける、しるしといへるは、何なるらんと見たまへば、おもてにしやくしをぞおきける、是はまことにしるしなりとて、やがてうちに入りて見たまへば、きのふの男にあひたまふめでたかりける智慧ぞかし、あるじ感にたへかねて、渴仰すること

な、めならず、我等のあさましくおろかなる戯むれを申しまゐらせぬへば、一々にときわかち、道をもまよはず、お入りゆこと、いつはりもなき天眼通にておはしますとて、ひとへに釋迦の如くに思ひける、

四九 三七日

この男もけうがるくせものにて、むづかしく難句をかけんと思ひけるが、法事もすぎぬれば、膳を出だしてすゑたりける、そのとき和尚膳にむかひ、殊には亡者法味のため、回向をなして三界にたむけふたをあけて見たまへば、めしにあらず、こぬかをもちすゑたりける、ふしぎに思し召され、しるをとらあげ見たまへば、これも同じくぬかなりけり、残りのものもさぞあるらんとて、よこ手を丁とう

ち、あらいたはしや、さては亡者の三七日にあたりひよと、かぶりもふらすのたまひける、男いよ／＼きもをけし、おそれをなしてうやまひける、その時男いふやうは、仰せの如くそれがしは、父をうしなひて三七日になりはべる、佛果にやいたりけん、もし地獄にやおちぬらん、後世のことおぼつかなく、かなしくいとひければ、一休仰せられけるは、何事があるべき、たゞ存生のふるまひをば、他人はよしとほむるや、あしとそしるや、いかゞ云ふぞと問ひけるされば、つねによこしまなることひはず、ひとへに正直にてまつたき性なりければ、他人はほとけにてありつると、ほむるも多しいと申しければ、一休きこしめし、しがれば、きづかひなることなし、これあみだにもあらず、観音にもあらず、即ち正直佛なり、佛果を得ることうたがひなしと、事もなげに仰せられける、男つく／＼と

うけたまはり、さては心安くひが、又それがしが兄にてひもの、三年以前にむなしくなり、常に佛道をも知らず、いたづらにあかしくらし、もはづかしながら天性愚頓にひひて、人の口にぬかりものと名を得ひこと、口おしき次第なり、たゞし罪をもつくらすひへば、佛果を得ひはんやと問ひける、一休きこしめし、中々、つみとがなしといへども、佛にはなりがたし、さやうのものは、愚僧がゆるすも他の人はゆるさざれば、のがれず、そのおつる地獄を、即ちあほの地獄といふなり、たゞ今生の如くに、後世のこととはべらば、佛果と地獄と、すこしも疑ふことなしと仰せられける、

五〇 極小なるもの

疎忽なる弟子、ある時一休へたづねけるは、世の中に、なる程ちい

さきことを、お物語りありて、きかせいへとありける、一休きこしめし、汝かたつむりと云ふ虫を見たりや、弟子いかにも見いといふそのかたつぶりめが貝よりいで、はひゆくときに、つの二つありそのゆんでの角さきに、國のかす五百あり、右手の角さきに、國のかす五百あり、合せて一千の國あり、しかるにこの世界の如く、日月空にかゝやき、山川下にそばたち流れ、森羅萬象少しもかはることなし、天運は須臾を以て、千歳とす、しかるにたがひに國をあらそひ、左は右をうちとり、右は左をほろぼし、合戦さらにやむときなし、あるひは一年國をたもちては、二年にて亡び、さてほろびし國も又おこり、年中の間、存亡たちまち地をかゆることたびくなり。されば須臾を千歳とするうちに、ふゆうの虫ありて、夕に生れあしたに死すること、これより小さきことなしとのたまひける、

五一 大の上に又大あり

弟子又、しからは、世の中に大なることは、何事かいはんとたづねければ、一休きこしめされ、心得たりとのたまひて、北海に水とりあり、名を大こうといへり、胴の大きき千里あり、羽の長さ千里あり、あはせて三千里には足らざりけり、この鳥南極を見にゆかばやとこゝろざし、北海より思ひ立ち、はるくくとおほほどに、一日に幾千萬里といふことを知らず、昨日もとび、今日もとび、年をかさねていそぎけれども、いつ行きつくべしとも知らざりけり、さしもの大こうもつかれば、とある木の枝にとまり、しばらく羽をやすめつゝ居たりけるに、下より大ごゑをあげて、かろらかに、我がひげさきにとまりたるは、何ものなるぞとさげびける、大こう大いに

おどろき、こはいかに、ふしぎやな、われは北海の水にあそぶ、大
 こうといふとりなるが、我がかたちを以つて、南極を見ればやおも
 ひ、はるくくとび來るといへども、つかれにおよんで力なく、この
 ところに羽をやすめはべるなり、かゝる大木をひげにもちたまふは
 何者にてかわたせたまふ、名のらせたまへとのしりける、その
 とき下よりいふやう、汝がかたちにて、南極を見んこと、おもひも
 よらず、我はこの南海のそこに、代々經たる海老なれども、我だに
 まだ見ざるぞかしいそぎこれより、かへるべしと、大きにさけびて
 いかりける、高慢しける大こうも、力およばずあざむかれ、もとの
 北海にかへりける、その時ゑびいかりをおこし、かゝる小鳥さへ、
 南極を見んとこゝろざし、思ひたつこそやさしけれ、我見ぬことや
 あるべきと思ひ、南海を立ちいで、南をさしておよぎける、漫々た

る蒼海をあけくれ急ぎけれども、廣大無邊の道なれば、いたりつべ
 うはなかりけり、海老も程なくつかれば、とあるほらのありけれ
 ば、しばらく立ちいりやすみける、そのとき虚空よりこゑを出し、
 何者ぞや、わが耳にいりたりと覺えたり、いそぎいでよとよばはり
 ける、海老これをきくよりも、我はこれ南海の底に、代々經たるゑ
 びなるが、かやうの子細いひて、南極に赴むきいといへども、はる
 くの道なれば、しばらくこゝにやすむものなり、しかるにふしぎ
 や、このほらを耳にもちたまふおことは、たれなるらんとおそれけ
 る、その時虚空より大千世界にも鳴りわたる大聲にて、我は天地開
 闢より、このうみに住むかめなり、おのれが身にて、南極を見んは
 かなふまじきなり、思ひたちしはやさしけれども、こゝろざしをむ
 なしうして、これよりいそぎかへるべしとよばる、聲、天地にひ

きてきこえける、さては忍びもかなふまじとて、終にむなしくかへりける、それよりかの龜又南極にゆきて見てかへらんとこゝろざし我がすむ海を立ちいで、南をさして行きけるときこへしが、まだ今日に及びてかへらず、いはんやいつかへらんといふこともなしと目さむるやうに仰せられける。

五二 乞食となりて檀家に行く

都にて、大分限なるもの、大事のとむらひをしけることありけるに折ふし導師には如何なる人を請じたてまつるべきと、思案まぢくにくらしける、そのころ名高きちしきあまたおはしけれども、中にも紫野の休和尚にしくはあらじと、佛事は明日のことなれば、いそぎ人をぞつかはしける、折ふし和尚は庵のちりをはらひ、庭を掃

除してまし〜けるが、すこしもなづまぬ御僧なれば、心やすく了承したまひけるが、さる程にやがていやしく様をかへ、あさましき乞食人に身をやつし、手あしに煤をにちりつけ、くさりごもをつけもくづの中より出でたるやうになりはで、かの門にたちたまひ、乞食ののゝしる如く、御供養のお修行をたべ、お慈悲を下されよととり〜にのたまひける、あるじ邪慳にはらを立て、見ぐるしき奴原を、追ひ出せと下知しける、その時下男二三人はしりいで、供養は明日のことなるに、今日来ておめく曲事やとて、もとよりたれとはいざしらず、いたはしや一休をたゝき出し、さんたくに打擲し、ふみたふしてぞ入りにける、一休はからき命をやうやくたすかり、むざんのしわざとおぼしめし、むらさき野へぞかへりたまふ、その日にもなりければ、昨日の様にひきかへて、あらたに湯あみしたま

ひ、衣をふるつてめされける、七丈のお袈裟を裾ながにひきかけ、金襴まじりにとりつくろひ、もとより殊勝に見へたまふ、一休おこしありければ、旦那大さによろこび、佛前へこそ請じける、されども一休すゝみたまはず、いやそれまではまゐるまじ、愚僧はこれに候とて、石うすになりてにじりたまはず、旦那はもだへてこれは何事にておはします、あらいまはしや、こゝは下郎のむしろなり、こなたへと通らせたまへとて、手を引きたて奉つれば、一休御覽じてしからばこの衣に、料供をたまはるべし、愚僧がたまはるべき仔細なしとて、一首の狂歌をよみたまふ、

わうばくの、三十棒を、あてられて、

みにはれきたる、蟬のぬけがら、

とよみたまひて、こつじきも愚僧も、同じ火と水なれども、昨日は

棒をくらひ、今日はおときをたまはること、ひとへにこの衣の色がひかる故なりとて、ぬぎすてゝこそかへられける、

五三 虚空に座す

一休和尚は、いき佛にてましくける、世上に風聞しけるが、あまりに言はんとて、さる人申しけるは、この間一休へ参りければよく來るとのたまひて、虚空に座したまひて、お庭の松の枝にお腰をかけられ、おんすゝみなされしなり、ふしぎなることにあらずやと、しげくとかたりければ、皆人それはいつはりこそ、人間と生をうけ、かゝる自在のなるべしやと取り沙汰しけること、ほのかに一休きこしめし、一條の札を辻に立てられしは、

佛法の修業すでに過ぎて、天眼通を得たり、虚空に座せんとす

れば則ち座し、座せじと思へば則ち座せじ、通力自在を得たり
若しうたがふ人あらば、見物に来るべし、
とか、れける、皆人これを見て、この間人の評判しけるが、か、せ
らるゝ上は、更らに疑ふところなし、さりながら魚をくつていかし
て吐くと仰せられしもまことならず、さることにてもやあらんとい
ふ人もありしが、いや、それとは品かはりたるにて、すこびた
る人二三人つれ立ち、一休の御庵室に來り、御高札のおもむき、疑
ひはあるまじけれども、直ちにおがみ申ししたしとて、これまで参り
いと申す、その中に、こびたるもの進み出で、申しけるは、これは
おいつはりにてあるべし、虚空は思ひもよらず、この扇の上へあが
りて、御覽あれと申しければ、いとやすきことなり、その扇の上へ
ものぼらんと思ふ心出づればのぼる、今日は早天よりのぼらんと思

ふ心なし、虚空へものぼらんと思へばのぼる、のぼらんと思はざれ
ばのぼらずい、かさねてお出であれ、上らんと思ふ時のぼりて見ん
と仰せられければ、みな人あきれてかへりける、その中の一人申し
けるは、いかにしても一休なり、人のあまりにいはんとして、天眠
通を得たまふといふことをおかしくおぼしめし、かくいましむるな
りとて、感じてかへりしとなり、

五四 自心自佛

一休和尚へある時、一人の旦那來りて申しけるは、この寺へ出入つ
かまつりいとて、人々申しけるは、話則の一則もぬけたるかなごと
て、我等の愚痴なるをあなどり、何とも迷惑いたし候間、何にても
一則お慈悲にしめしたまへと申しければ、やすきことなり、さらば

参じられよとありければ、参ずるとは、いかなることにてはべると申す、いや何なりとも、佛の道にて合點の行かぬことを尋ねられよといへば、畏まつていとて、佛殿をさしてはしり出る、一休おかしくおぼしめし、見ぬかほしておはしければ、刹那のあひだにはしりかへる、一休はいづくに行きけるとのたまへば、佛の道にて不審あらば、申せと仰せありしにより、佛の道は佛殿へ行くみちなりと存じ、一はしりに見てまゐりしが、いかにも合點のまゐらぬことこそ御座い、あの山門のほとりの松に、巢をかけてしが、なにの巢とも更らに合點まゐらず、大かたさぎの巢には見えていへども、しかとはわきまへずいと申す、いや、からすこそ今時分には巢をかくるとのたまへば、いや、とてものおん事に、お慈悲をたれたまひてしめしたまはれと申しければ、その義ならばとて、梯子をもち行き

て、のぼりたまへと仰せられければ、かのものいそぎのぼりて、かの巢をおろして見れば、中に鳥の子もなく、何とも見へぬなり、一休何なるかとのたまへば、何も中にはなくはべると申せば、一休和尚、

さぎの巢を、おろして見れば、

からすにて、

これにつけて見たまへ、こゝが一則なるはと仰せられければ、かのもの、これにつくべき心なしといふ、一休仰せられけるは、そこなるは、われも汝に一則さづけ知らすべき心はなしとしめしたまへばかのものおどろき、さては一休さまも、仰せられがたくはべるかと申しければ、自心自佛とこたへたまふ、かのもの横手をはたとうちてかへり、遂に自得しけるとなり、

五五 魚を釣りて食す

一休和尚片田のいほりにおはせし時、うみばたへ立ちいでたまひて毎日つりをたれては、魚をとつてまゐりけるに、御兄弟弟子の僧たち、これは不律なる仕合せなりとて、一休を一間どころへよびいれて、口々に異見しければ、一休のたまはく、おのゝく、だちは、學問をするるとて、何事をかしたまふや、我等はいにしへの祖師のまねをするを、禪宗の學問と心得たり、しかれば例なきことは仕つらさ、いでく古への例をしらして見せんとして、もとより繪は器用なり、蜆子のゑびをつりたまひて、くひしところをありく、と繪にかく、なほ一首のうたをかゝれける、

古への、かしこき祖師は、ゑびつりし、

我はあほうで、魚つりてくふ、

とあそばして、彼の僧だちにさしつけ、さあらぬかほにて居たりける、みなく彼の繪を見て、さても器用なる繪や、見事なるかなの書きぶりやと感じけるか、その中にての老僧あざわらひて、いにしへの祖師のゑびをお釣りありてまゐりしとて、貴僧の若きなりにてその魚をつりまゐらんこと、鵜の真似してからす水のむといひしたぐひなり、さて貴僧は、この蜆子和尚のゑびつりてまゐりし御心根を、しろしめされけるが、却々及びなきことやとわらひければ、一休すこしもさわがず、色をもかへず、さてく、貴僧のおろかなる心にては、蜆子のゑびをくひし心根合點まるまじ、それ人は若きにもよらず、老いたるにもよらず、道においては老若はあるまじ、老いたるが悟道せば、門外のむく犬も悟道したるかして、毛もぬけ

すねたゝず、にじりあるくは、若きとて悟道せまじきや、世尊は三十にて成道しけるとうけたまはる、我等が祖達磨大師のいにしへをうけたまはるに、ある時般若多羅尊者の來りたまひて、光明かくやくたる玉をさゝげ、三人の皇子に見せたまひつゝ、心をためさんとて、おのゝこのたまを寶としたまはんやとて、問ひたまひしに、おん兄二人は、この玉にまさる寶は、又あらしとのたまひけるに、達磨大師は、七才にて一の乙皇子なりけれども、この玉は、世寶にて、寶にあらず、智光の玉こそは、又なきたからなれとて、かの玉をなげうちたまひければ、尊者おどろき、かゝるいとけなき身に、ふしぎなる人かなとて、則ちおん名をだるまとつけられける、はじめは菩提多羅と申せしとかや、達磨とは、よろづの事に達し、通じて、みがきたてたる様なる人なりとの心とかや、しかれば悟道

は老若にはよるべからずと、一休手を打ち、彼の老僧を笑ひければ、老僧も人中にてこみつけれられ、赤面して申されるは、かる口にまかせて申されたり、如何口にては云ふとても、心はさもなきものに候よ、貴僧は實正觀子のゑびつりし、御心根を知りたまふか、一休こたへて曰く、なかゝ存じたり、老僧申さるゝは、おのゝいかにとおぼしめす、それ禪宗は以心傳心なり、いかでか觀子のお心が知り得らるべき、觀子にならずば知りがたしとあざわらひ申されければ、おのゝも尤もゝ、觀子の心は凡人の知りがたきことなり觀子にならで、いかにしてかしられんや、一休觀子になりて、御覽じけるかと、口々にわらひければ、一休すこしもさわがず、さてさておのゝは、おろかなることのたまふものかな、我等は觀子にならねども、觀子の心根をよく知りたりとのたまへば、みなゝそ

れは無理なりと申されければ、きゝたまへ人々よ、しからばおのおのは、この一休におなりなくば、一休が蜷子の心を知りたる心根を得知りたまふまじとて、わらひたまへば、おのゝ藤さく門にて逃げられけるとかや、

五六 高野山に登る

一休和尚高野山へのぼりたまひて、四方の山々をながめ、さてもきゝしよりおもしろき風景かなと、ながめておはしければ、高野のひじり共立ちいで、一休を見て、いかなる人とたづねければ、いや、名もなき道心者にてはべるが、この山はじめて一見仕り候へば、あまり風景がおもしろくはべれば、こしをれの詩か歌か、一ツ仕つらんと存じて、つくづくとしてはべるとのたまへば、ひじり共一休と

は中々思ひもよらず、しほらしや、わこせはまことにめくらのかきのぞき、すくちのうそも心なぐさむとや、その身はかしこでこそめき、うそさむげなるなりにて、ゑりのうすさはこの山の名物のかみそりのはよりもうすくて、ほそくびいとあぶなしなど、口々にわらひける、一休かたはらいたく思しけれども、いかにもそらさぬかほにて、一首仕つりひ、硯紙たまはりひへのたまへば、何と、一首出来いとや、さてもはやしと、又口々にわらひて、やれ硯紙をいだしければ、一休筆をおつとり、東坡居士が經山寺の詩を、山なりに作りしことを思しめしめだされて、左の如くに物されたり、

山秋落葉

山春開茶發空

山迎連峰報佛心亦

山高近三都率内院一士進一空

山閑表三華藏世界一地醒寂

山平幽源化二佛惱亦

山夏涼風煩寂

この山形の詩のよみ方は、左の如し、

山高近三都率内院

山閑表三華藏世界

山迎連峰報二佛土

山平幽源化二佛地

山春開花發心進

山夏涼風煩惱醒

山秋葉落空亦空

山冬素雪寂亦寂

かくの如く、即時に筆をこひたまへながら、あそばしければ一山の
ひじりだち、たなごゝろをうちて、さても見事なる筆跡や、目なれ
ぬ詩の体やと、口をあきてふさぎかね、先より皆々よしなきことど
もをいひて、お僧をはづかしめけることのはづかしさよ、いかなる
人ぞ、名をなのりたまへと、口々に申しければ、その詩の下にひと
のたまへば、まことに一文字ひは、何一とか申すぞとたづねける、
その中にひじり一人眉をひそめ、彼の詩の筆跡を見る、一休ははや
おいとまとて、御下向あらんとす、かの僧この筆は、正しく紫野の
一休なり、殊に一とかきはくせものなり、やれひきとめよとおつ
かけたり、一休これは何事なると仰せられければ、先より存せず、

皆々慮外申したり、御免あれ、まづお歸りありて、坊へ入らせたまへと、やう／＼に申して留めけるが、はや御下向あるべしとのたまへば、色々馳走申しておくり奉つりけるに、ひじりのうちに、一人申すやう、あの如き名僧、この山へまたのぼらじ、大師の御影に贊をたのみ申さんものをと又おつかけたてまつる、何事なるとおほせらるれば、しか／＼と申す、一休わらひたまひて、その御影をいそぎ持ち來れとて、道なる茶屋にてやすみておはしける、皆人おどろき、大師の贊を乞ふに、立ちながら思案もなく、あそばすこと聞きしより、大博士の祖師かなと、舌の根をふるひて、大師の御影をもち來りければ、立ちながらあそばしける、

弘法大師いきばとけ、

死ねば野原の土となる、

と、一筆にさら／＼とあそばしける、皆々深き意味のあることかといそぎ登山して、學匠に見せければ、格外のおどけごとなりしかばひじり共、又口を得ふたがざりけるとなり、

五七 熊野に參詣す

一休和尚ある時、熊野へ御參詣まし／＼て、本宮へあがりたまふ、比しも春の半すぎなれば、山々谷々の櫻、都の二月の比よりも、いとめでたかりければ、拜殿によちのぼり、四方の風色をながめてまし／＼けるところに、社僧一人いで、貴僧はたゞ人とは見まゐらせずと申しければ、なか／＼、われ等は只人にてはははす、出家にていと仰せられしかば、彼の僧、さてもよきお口かなと、一つ二つ物がたりしけるが、一休高野山の詩のことをおぼしめし出され、この

山にても、一首つくりてなぐさませんと、そのまゝあそばされけるかの僧に、硯と筆をこひ、かきつけて宮前にそなへたまふ、この僧おふであとのめでたきを見て、いよく推量申したり、都衆と見たてまつるはひがめかと申しければ、よくこそ見知りたまへり、我等はみやこの一休なりと仰せられしかば、さてこそ、只の人にてはあらじと、はじめより申しけるはといへもあへず、かの拜殿に上げおきたまふお作の詩をとりまゐりて、お名をあそばせとこひければ、あそばしける、その詩は、

山里放光

山龍吟落碧三

山海浪高船片雲社

山廟等一扶桑神々漲景

これを普通の如くに記すれば左の如し、
一休老人偶題

山客成群數万人々盛春

山樓鐘動月輪惱宮

山谷洗流煩本

山花猶馥

山廟等一扶桑神

山客成群數萬人

山海浪高船片々

山樓鐘動月輪々

山龍吟落碧雲漲

山谷洗流煩惱塵

山里放光三社景。
山花猶馥本宮春。

とあそばしける、さてかの僧一休なりとて、横樞にて庭をはき、杓子で芋もり、御馳走申すこと中々申すもおろかなり、折節花のさかりなれば、庭前の花を見たまへとて、酒肴を出してなぐさめ申す、さて彼の僧申しけるは、この山へ又お出でなさるゝははかりがたし末代の寶にもなるべければ、何にても一筆あそばしたまはれと申しければ、やすきことなり、お望みあれとのたまへば、さても拜殿にてのお作の詩は、御自作にていか、又いにしへもかゝる詩のはべり候事にて候かと、申しければされば、古よりありし事なり、もろこの詩人東坡居士が、
經山寺にてつくりし詩は、

これを普通の如くにすれば、左の如し、

山僧
山鳥偷來
山雲飛片菓間
山遠路幽遠片喰道
山花發茂林沈吟尋
山水碧沈樹相
山猿抱還
山客
山花發茂林
山水碧沈々
山猿抱樹吟
山雲飛片々
山鳥偷葉喰
山猿抱樹吟

山僧來問道

山客還相尋

とかたりたまへば、さてもく、めづらしき詩や、この年まで、かゝる山のおくに住みければ、かやうなる詩は、目なれもいたさず、兎角ちと、我等が愚なる耳にも耳なれ、目にも目なれしことをあそばしたまはれと、のぞみければ、貴僧の耳なれ目なれたるのは、何かなと、いひたまふところへ、折ふし櫻花にはかにはらくと、おちちりみだれければ、貫之がうたをふとおぼしめしいだされ、いかにも大文字にあそばしける、

櫻ちる、木のした風は、さむからで、

空にしられぬ、白雪ぞふりける、

これはいかにとのたまへば、彼の僧これもいまだ、耳なれずいと申す、所へ又、さくら花風にちらされ、さつくとみだれければ、そ

のまゝあそばしけるは、

雪やこんこ、あられやこんこ、

お寺の柿の木に、ふりやつもれこんこ、

これはいかにとのたまへば、彼の僧はらにすえかね、さてもおどけたるお僧や、いかに耳なれ目なれしものとして、それはあまりにいと申せば、一休もわらひたまひて、實に尤もなり、いでくその望みの、目なれ耳なれしことをかきて、まゐらせんとて、

きねがすい、浦山木こり、谷のこゑ、

入相の鐘に、庭前の花、

とあそばしければ、彼の僧さてもよき、おかる口や、まことに耳なれ、目なれしものを、望みしこそ、おろかなれとて、お口のかるきに感じて、おくゆかしくこそはべりけれとて、いろく馳走申して

おくり奉つりけるとなり、

五八 人の女房を口説く

一休和尚も、春の半の頃なるに、花に心をよせたまひて、いく枝もまじへ、花かごに立てたまひ、酒などまわり、心もわか／＼となりておはしましけるところへ、一休の旦那のおく方まわりける、よくこそ來りたまふとて、さ／＼などすゝめおかしきことなどおはなしありて、ひたもの酒のみてあそびければ、日もはや西山におちこちのたつきも知らぬお寺に、かの女房もべん／＼とはなし居ける、一休いかゞおぼしめしけん、今宵はおとまりあれと仰せられける、女房申しけるは、かりそめにまわり、長遊び仕つりいさへ、なにとやらん道にあはぬやうにはべるに、一夜とまり申さば、浮名や立ち申す

べし、その上夫ある身のことにていへば、いかに心は左思ひても、かなひがたくはべる、まづおいとま申すとて、立ちかへりしを、一休袖にすがり、ひらに今宵はとまりたまへと引きとめたまふ、女房申すやう、いままでは、一休様をいき釋迦のやうに思ひしが、わらはにお心ありて、とゝめたまふかや、きやうこつなる仰せかなと、申しければ、一休わらひたまひて、其方へ心かくればこそ、愚僧も是非にとどめ申せ、心かけぬものが、おとまりあれと申すものかと仰せられければ、沙汰のかぎりや、夫ある身が、かゝる所にはべるべきかと、ふりきつてこしにのり、立ちかへりける、さて夫にあひて、一休をば佛のやうに思ひ、そなたも左思しめさんが、いたづらなるお坊や、わらははに酒をすゝめたまひて、今まで引きとどめあまつさへ、今宵は一夜とまれと、ひらに仰せられける、かならず

あの寺へ、まゐりたまふなと、二心なき意見をくりかへし申しける
 夫はさるものにて、手をうちてわらひ、さりとは佛なり、汝がか
 く云ふもことわりなり、よく思ひ見よ、いかにもかにも、われをた
 のむ旦那の女房に、なれ〜しげなる、一夜とまれとは、なか〜
 出家の身にては言ひがたし、よし一休和尚とまくらをならべば、今
 生行末のうつたへなるべし、われらをかねはべらず、いそぎ行きて
 一夜をあそびたまへ、なに〜の誓言ぞ、我等のねたみこゝろはな
 しと申せば、さあらばひつかへしまゐるべし、およろこびあるべし
 と申しければ、いそぎまゐりて、ゆる〜と一休和尚をなぐさめた
 まへとありければ、女房よろこび、一間どころへ立てこもり、白粉
 口べに、狐の化けたる如くにひきつくるひ、衣裳をかざりて、いそ
 ぎこしにうちのり、一休へこそまゐりけれ、一休ははやねたまひし

に、門ほと〜とた〜、一休おどろき立ちいでたまへば、彼の女
 いかにもほそ〜としたる聲にて、さきには是非とおほせられけれ
 ども、夫の心うかいはしくて、ふりきつてたちかへりし、あまりに
 おのこり多くて、夫にいとまをこひひへば、くるしからずと申しは
 べるゆゑ、とまりがけにおんはづかしながら、まゐりけると申しけ
 れば、一休いや〜、もはやいやにてい、おかへりあれ、先程はこ
 なたへ、心かゝりい、はや心かゝらすい、はや〜おかへりあれ
 くとて、門戸をかたくしめて音もせず、さりとは、おなぶりい
 かと申しけれども、あへて聲もせず、是非なくかへりて、夫にしか
 くとかたりければ、左あらんと思ひけることよとわらひ、天下の
 老和尚なり、心の動くときは動かし、動かざればうごかしたまはず
 もはやとはみぢかし、まことに行く水の如きお心や、いさぎよい

さぎよし、とかく凡人にてはなしとて、いよくたつとびけるとなり、

五九

ふぐを喰つて死せしものゝ

引導

堺にての事なりしが、一休和尚へ常にまゐりて、お心やすく御意を得たる、又次郎といふ町人ありける、ある時ふぐ汁をしたゝかにくひてけるが、ことの外にゑひて、その日のうちに死しけるが、いまはの時に申しおきけるは、我世にありしときは、死ぬるはいつの頃ぞやと、思ひける程なれば、後世とて願ひおきしこともなし、しかれども、一休和尚に常に伺候申し、おものがたりどもうけたまはりし、結縁あれば、引導をもたのみたてまつれかゝる不慮なる死をし

けると、さこそあはれにおぼしめすらめ、かならずと言ひおいて、遂にむなしくなりけり、然るところへはや時分もよくいあひだ、一休お出でをあふぎ奉つるとて、再三人をこしければ、一休仰せられけるは、いや、我等まかり出るにも及ばず、引導もつぶさにかいてつかはすべし、たれにてもよみあげてほふむれよとありければ、妻子なげきて、遺言にていあひだ、ひらにお出でくださいよ、この世のお慈悲とさましくどきければ、一休のたまひけるは、我等がいづれば、却つて彼が迷ひとなるなり、すなはちかきつけてつかはすべしとて、

海中有毒魚

名云河豚魚

面腹白背斑

人不食此魚

嗚呼痛哉

又次郎喰之忽死矣

彼歳五十四。彼歳五十四。
合せて珠數一連、百八煩惱のきづなをふつつときつて、行きたい方
へそつと行け、

木曾十七、寅の年、角のないこそ、

添いたけれ、

とあそばして、つかはされれるとかや、しかればおのゝきもをけ
しけれども、仰せなればその如くに行ひけるが、そのいんどうのか
いたるを、その子ども秘藏し、つたへてその家のたからとし、又も
なき墨跡にて、今の代まで所持仕つりてありけるとかや、

六〇 廣大無邊の精靈棚

一休和尚の時代までは、方々の寺より、七月十四日には、大内へ燈

籠をさゝげける、大徳寺にても、開山大燈國師より、故ありてさゝ
げしかば、後々まで例になりて、やめがたくぞありければ、一休も
こむづかしくやおぼしめしけん、ある時内裏へ燈籠あげるとて、狂
詩を一首つくりて、その燈籠にそへてさゝげたまひけるは、

性靈今日出來迎、雨露直供万葉棚。

挑得灯明天上月、松風流水讀經聲。

とあそばしければ、みかど御覧ましゝて、まことに一休の詩な
るかな、用なき燈籠を求めけること、何の意なるや分明ならず、自
今以後大徳寺よりも、何處の寺よりも、七月に燈籠をさゝぐるこ
あるべからずと仰せ出だされけるとなり、世の人これをきゝて、さ
てもゝも名僧かな、かゝるおこゝろざしにては、定めてお寺には
性靈まつりはあるまじ、若しあらばかはりたるにてやあらん、いざ

や人々、一体のお寺にまゐりて見物し、末代のかたり句ともなすべしと、四五人づれにてまゐりて、一体へお目にかゝり、この間禁裏へさゝげたまひし、灯笼の詩、洛中にてこれのみさた仕りひ、定めてかゝるおこゝろざしにては、性靈まつりもあそばしひまじくいと申しければ、いや、われ等は、三界の衆生を思ふ故に、有縁無縁の悪鬼をまつりて、種々のものをたむくるゆゑ、廣大無邊なる性靈まつり仕りていと仰せられければ、みな人案に相違し、このお寺にては、見え申さずひが、いづかたにかおんまつりひぞとたづねければ、これより四五町わきにかゝりていと仰せらるみな、人申しけるは、とてものおんことに、見物仕りたくひ、お人そへられ下されいと申しければ、奇特なることをいひたまふかた、や、人までもなし、我等同道し申すべし、手むけしたまへと、まことらしく申

しければ、皆々よろこび、お跡につきて行きければ、東河原へおいでありて、これく見たまへとて、兩方のお手をひろげたまふ、みなくこゝもとにてひかと、うとくしければ、一体これ見たまへとて、くるくたまひ、手をひろげたまへども、みな合點せざりければ、おのくは見物なるまじきぞ、いひてきかすべし、只耳にておんき、あれと仰せられければ、皆人あきれて立ちすはりてきければ、一体一越聲をあげて仰せられけるは、山城の、瓜やなすびを、そのまゝに、たむけになれや、かも川の水、きゝたまひけるか、これ大なる精靈棚にてはなきかと仰せられければ、みな人、さてもく、いやともいはれぬ御意やとて、かんにたへてかへりけり、

六一 扇の五戒

ある時、蜷川新左衛門來りて、佛法ばなしなどしてあそび居けるが、一休の仰せられけるは、今時の出家は、こゝろざしうすし、佛は五百戒さへ保ちたまひしとかや、せめてそのかずとりの五戒ばかりもよくたもつべきことなりとのたまへば、新左衛門申されけるは、まことに沙門は申すに及ばず、俗の上にも、せめて五戒はたもちたきことにいと申すに、一休いや、俗は是非なきことなり、出家にはもたせたく思ふなり、はながら目に見え耳にきこゆるもの、五戒をたもつことなし、わづかなる一尺の扇さへ、五戒をやぶる上は、まして僧俗いきとしいけるものとして五戒をたもたざるはことわりなりと仰せられければ、新左衛門申されけるは、この扇子も五戒をやぶ

り申し候や、中々やぶりたり、これは又和尚の出來口にてはべらんで五戒を一々問ひ奉るべし、こたへてきかしめたまへ、いつもの御頓作のおかる口うけたまはらんと申しければ、さらば一々とひたまへ、答へて見申すべし、新左衛門問ふて曰く、如何なればこれ殺生戒をやぶり候ぞ、答へて曰ふ、竹を截り、骨となさるや、問ふ、如何なればこれ偷盜戒をぶり候ぞ、答へ、虚空の風をぬすまぬや、問ふ、如何なればこれ邪淫戒をやぶり候ぞ、答へ、かなめくゝとあはせずや、問ふ、如何なればこれ妄語戒をやぶり候ぞ、答へ、書そらごとを書かざるや、

問ふ、如何なればこれ飲酒戒をやぶり候ぞ、
答へ、ひらいてざらんざ言はざるや、

これ扇の破戒ならずやと仰せられければ、今にはじめぬお口なり、
けれどもひとしほ有りがたく存じ候、はながら五戒の内、偷盜戒の
お答へに、ふしん申したく候、一休答へて曰く、いかなる不審ぞや
新左衛門曰く、古語に、

扇是日本扇、風不日本風。

ときくときは、扇こそ日本の扇をうごかすらめ、風は日本ばかりと
は限らず、千里同風とあるからは、ぬすむところいなやと、おどけ
て一句申しければ、一休新左衛門と突如としてのたまふ、やつと答
ふれば、一休すぐに一首、
音もなく、香もなき人の心にて、

よべば答ふる、ぬしもぬす人、
とあそばしければ、さてもよきお口や、先ほごよりの問答おむづか
しながら、一筆あそばしたまはれとて、かいてもらひ、かけものに
せられけるとなり、このかけもの、都のうちにもちたる人あり、こ
れをうつす、

六二 狗子佛性

一休和尚ある旦那に、狗子佛性の話をさづけたまひしに、この人、
狗子とは犬の子なり、これは佛性とは、何とても合點まゐらずと申
しければ、きいて見たまへとて、仰せられける、
犬の子に、あやかする人の、しはごこそ、
ほとけともなれ、地獄にも行け、

むかひどの、いぬころは、まだ目があかぬか、おつばにまゝいつて、ころくくや、

と仰せられければ、今日があきて候、さて狗子の所はやうく、今日があき候が、趙州の有無のところは、千年工夫仕つり候とも、愚痴のわれ等には、得道なりがたしと申しければ、歌よみてきかすべしこのうたを常に吟じて、心得て見られよとて、

なしといへば、なしとや人の、思もらん、
答へもぞする、山びこのこゑ、

ありといへば、ありとや人の、思ふらん、

答へてもなき、山びこのこゑ、

とあそばしければ、しばらく工夫して、しからば、ありともなしともしれぬにて候かと問ひければ、

有無をのする、生死の海の、あまをぶね、

そこぬけて後、うむもたまらず、

と仰せられければ、彼の人この歌にて得心して、一首よめる、

有無ぞしる、なにおもひけん、趙州も、

なかりしさきの、犬のひとこゑ、

と申しければ、一休きゝたまひて、おつばのまゝをひと口まゐりけるよと、わらひたまへば、旦那禮拜してかへりけるとなり、

六三 大風大雨見舞

頃しも八月の下旬なれば、大風大雨しきりにして、洛中の家も塔もそこねたれば、蜷川新左衛門、とるものもとりあへず、一休和尚へお見舞申して、お坊お内に御座候か、何んとく、ことの外の大風

大雨、お寺はいづ方もそこね申さず候やと問ひければ、一休いであ
ひたまひて、よくこそお心づき候ものかな、まことにめづらしき大
風にて候、はながら當寺はまづ何事も御座なく候とて、一首いたさ
る、

わがやどは、はしらも立てすふきもせず、

雨にもぬれず、風もあたらす、

と仰せられければ、そのおんいほりは、いづくの程にて候ぞと申し
ければ、一休わらはせたまひて、さればこそ、大事のことをおたづ
ねありしよ、

わが庵は、みやこのたつみ、しかぞすむ、

よをうじ山と、人はいふなり、

と仰せられければ、さては、喜撰法師と相住みなされ候かとたはふ

れければ、いや喜撰にかりてあるなりとありければ、さては借屋ど
のにて候かと申して笑ひしかば、一休又一首いたさる、

かりの世に、かしたる主も、かり主も、

かすとおもはず、かるとおもはず、

とあそばしければ、新左衛門このうたを感じて、扇にかきとめ、か
りそめにまゐりても、得道の徳はべるとて、よろこびかへりけるが
門外よりたちかへりて、さてく、おかしきたはれごと仰せられて
伺ひ申すべきと思ふことを、うちわすれ候て、すでにかへらんと仕
り候、一首につり申し、このころ、いかゞ申すべきやとて、よ
める、

ふくときは、さてさわがしき、風なるが、

ふかぬときには、いづちなるらん、

と申しければ、そのまゝ御返歌ありけるは、

ふくときは、むべさわがしき、山風の、

ふかぬときには、ふかぬ風かな、

と仰せられければ、新左衛門物をもいはず、うなづきてしばらく禮拜をして、かへりけるとなり、

六四 自からふいて行く

一休和尚關東に赴かるゝとき、いと身がるにいでたれ、且つ普化僧の姿となり、尺八を吹いて道中されたり、ある日途中にて、知りあひの山伏にあひたまひしに、山伏ちらりと一休の變装せるを見そしらぬ体にて、問ひかけて曰ふ、いかに普化僧殿、いづ方へまゐられ候ぞと申しますれば、一休こたへて、さればにて候、もとより普

化僧の身のことにて候へば、いづくと定めたるたびにてもなく、たゞ風にまかせて、風のまに／＼ゆくばかりにて候と申されければ、山伏はすかさず、さあらば、若し風のなきときは、いかにめさるゝかときけば、一休さわがす、腰なる尺八をとり出し、かくの如く、みづからふいて行くばかりにて候とて、尺八をふきながら、さつさつと行かれけるとなり、

六五 下より上にさがれるもの

一休和尚より數代前の禪師の時、ある人より一つの難問をうけたりそれは、下より上にさがるものは、何であるとの問ひなりし、大徳寺の大和尚も、この難問にはいたく心をくるしめ、いろ／＼に考へられしかども、遂に答案を工夫し得ず、これを苦にやみつゝ、むな

しく冥土の客となられたり、この和尚は、この答案を工夫し得ざることを、甚だしく遺憾に思はれしと見へ、毎夜のやうに後住のまくらべに立ちあらはれ、下から上にさがるものと云ひつやけて、いくともなく消えうせるも、誰れとてこの解を附し得るものなく、後には五月蠅さにたへず、他に轉住するもの多かりしと云ふ、一休は養叟禪師のあとをつぎ、大徳寺の後住となられて、始めてこのことあるを知られ、例の幽霊があらはれ、下から上にさがるものはいふ尾につき、一首のうたをよまれたり、

藤棚の、水にうつりし、花のかげ、

下より上に、さがるものかな、

とつけられければ、幽霊はあつと云ふて、そのまゝすがたをかくせしが、以來亦あらはるゝことなくなれりと云ふ、

六六 濁酒

一休和尚の山すまゐりして、銳氣を養ふて居られける時、ある旦那、寒中見舞にとてまゐられ、和尚のにごり酒を飲んで居らるゝのを見られ、一首して、

山居して、心すますと、きゝぬるに、

にごり酒をば、いかで飲むらん、

と、歌にて難じられければ、一休取りあへず、

山居して、のむべきものは、濁り酒、

とても浮世に、住む身でもなし、

とよまれて、かの旦那のうたがれをとかれければ、感にたへられけるとなん、

六七

釋迦も達磨もひよくご出る

一休和尚ある時、木津川のほとりを通られけるに折ふし眞夏のころなれば、ひとりの婦人あかはたかになりて、川の中に立ち居りしに、一休はこれを見て、何んとおもはれしか、婦人の陰部にむかひ三度まで禮拜して通られける、これを見し人々、ふしぎなことに思ひ、いろくさまぐに評議しける、甲の曰く、出家の身にてありながら、婦人のかくしどころに三拜するなごいふこと、氣ちがひにあらざれば爲し得ぬところなりと、乙曰く、いやく、何か仔細のあることならん、おさへて尋ね見るも一興ならんと、人々はみな乙の議に賛し、あとをおひかけて一休をおさへ、問ふて曰く、お坊はふしぎなる方かな、女のかくしどころを見て、三拜して通られし

は、何か理由あることなるや、教へてたまはれと請ひば、一休は何とも答へられず、

女をば、法のみくらと、いふぞ實に、

釋迦も達磨も、ひよいくと出る、

と口吟されながら、そのまゝ行きすぎられもと云ふ、後に一休禪師なりとき、舌をまいて感せしとなん、

六八

死に來る人はみなおつる

一休和尚の堺の浦に參るられしとき、こゝに有名なる地獄と云へる遊女ありしが、一休の名高き大智識なることをき、一首のうたをよんでとひかけたり、

山居せば、深山の奥に、住むよかし、

こゝはうきよの、堺ちかきに、
といふ意なりし、一休は取りあへず、

一休が、身をば身ほどに、思はねば、

市も山家も、おなじ住居よ、

と返歌されしが、いかにもおもしろき女なり、ゆきて問ふて見ばや

と、そのまゝ地獄のところゆき、

きゝしより、見ておそろしき、地獄かな、

と、たはむれに上の句を口すさまれければ、地獄は取りあへず、

しにくる人の、おちざるはなし、

と、下の句をつけられしといふ、

六九 桂川の水なり

一休和尚は茶を好まれ、人の京都に出づるものあれば、かならず、
一つの瓢箪をさづけ、鴨川の水を汲みとらせ、それにて茶を煮じ、
これを飲むをよろこんで居られたり、ある時京に行く人あるを幸ひ
とし、これに依頼するに鴨川の水を汲み來ることを以てされしに、
その人遂に失念して、ひそかに桂川の水を汲みとり、鴨川の水をく
み來れる風をなして、和尚のところへ持ちゆきしに、和尚は大いに
よろこばれ、直ぐに湯をわかし、茶を入れて我も呑み、客にも供せ
しが、一杯のみつゝ首をひねられ、又一杯をのみ直され、その客に
言はるゝやう、この水は、鴨川の水にあらず、これは桂川の水なり
鴨川の水には、このくせなしとはなされしかば、客は大いに無念に
耻ぢたりと云ふ、

七〇 末期の句

一休和尚の末期の句とて、世の人の口にまかせけるは、その数はな
はだ多し、これが實なり、これが不實なりといふも、不實なり、い
かにならば、彼も御影をかいて賛をもとめ、これも賛を求むれば
その賛には出るまゝに、あそばしけるとなり、ある所の御影の賛に
あそばしけるは、

朦々三十年。淡々三十年。

朦々淡々六十年。末期放糞捧二梵天。

又左の如き語もあり、

借用申昨日。返辨申今日。

かりおきし、五のものを、四つかへし、

又ある末期とやらんに、あそばしけるとて、人のいへるは、
生也死也、死也生也、

柳はみどり、花はくれなる、
喝、

柳不緑。花不紅。御用心、
一休筆題、

七一 自畫自賛の御影

ある人、一休のお寺によしありてまゐりけるが、沙彌、小喝食だち
をあつめて、一休の御遺言をおがみはべりし、一々名譽をきはめた
ることどもなり、

自畫自贊の御影を拜みはべりしに、頭はいかにも長髪にして眼をきつと見出し、うすあかき衣をめし、丸竹の杖をつき、椅子にこしかけはべりて、贊に、

柳はみどり、花はくれなる、

とあそばして、一頷あり、

行脚事畢。今日時節。

折主丈子。燒二六月雪。

虚堂之再來、天下老和尚、

一休宗純末後書之、

とあそばしける。見る人目もすさまじくして身の毛もよだつことなり、

七二 虚堂の再來

一休和尚自からいへり、虚堂の再來なりと、その外ふしぎなることを、かきおきたまふこと多し、その遺言のおくに、我死して百年過ぎて、唐より禪師來らば、我が再來と思へ、又二百年にあたる年、我が死骸を土よりほり出して見るべし、若しかたちくちたらば、いひおきしことは、みなたはことと思ひて、かきおきし語ども、火中すべし、おほかたは、死骸そこねまじとのたひおきしとなり、今年百八十三年になるとなり、隠元禪師來朝より、百年あまりと仰せられしに相違なし、隠元は一休の再來かや、しかれば二百年目は、今十七年なり、おしがいは定めてかはりたまふまじきなり、

七三 一休の木像

今の一休和尚の木像は近きころつくりけるが、諸旦那あるひは弟子衆まで、一休和尚のおんそうがみを、守袋に入れて持ちけるが、かの木像をつくりし時、御長髪の体なれば、直のおそりがみを、おひげ、おまゆ、おかみに佛工がうるけるとなり、おそりがみを吾等まで、おがみ奉つること、ありがたからずや、毛の色もかはりたまはず、百八十三年を経れば、二百年目にお死骸をほり出して、見るまでもなく、ありくとおはしまさんこと、うたがひなし、

七四 寒山子に似たり

一休和尚のおこゝろざしを思ひ見るに、寒山子の風狂にかはること

なし、寒山子の詩の句に、

我心如寒月。秋水清無底。

とはべりしに、一休の道歌に、

我がこゝろ、そのまゝ佛、いきぼとけ、

波をはなれて、水のあらばや、

とはべりたまふ、これ寒山子の心も、一休和尚の心も、おなじことにあらずや、寒山は文球なりと傳ふ、一休は定めて普賢なるべし、されば狂雲集には、その詩文おほしといへども、たゞの人の目に見へぬをにくみて、その中よりかなつんぼの、耳にも入りやすき詩をかきぬき、めくらの目にも見あきらむべき、平假名にてしぼりつゝにはにも覺へさせ、おとなにもいまだしらぬ、人に見せはべらんとかくことをかへり見ず、仄平をわきまへねども、人のかきあやまり

をもつて、わがあやまりとす、われあやまりてもくるしからねば、
かくあらはしける

七五 一休和尚の狂詩二十首

題鉢敲

晝不^{ひるはず}笠^{かさ}兮^や夜不^{よすしとねせ}褥^{ふし}。
瓢^{へう}箆^{たん}扣^た罷^{きやん}有^{ある}二^{なんの}何^た益^{えき}。
東西南北自由身。
花發十方淨土春。

題影法師

元來有^{もとよりあり}物不^{ものはず}離^{はなれ}身^み。
全体分明無^{ぜんたいぶんめいむ}二^{かん}面目^{めく}。
揚^{あが}手^て同^{どう}揚^{あが}伸^{しん}足^{あし}伸^{のび}。
起居動靜似^{ききよどうじやうに}悔^{あな}人^{なるひと}。

彼岸

今日彼岸欲^{こんにちらひがんぼつ}開^す鉢^{ひつ}。
余身貧乏雨晴稀。

無^な簀^み無^な笠^{かさ}又^{また}無^な杖^{つゑ}。

梅法師

往昔江南沒落時。
欲^{ほつ}問^つ横^{よこ}斜^{しや}疎^そ影^{えい}古^こ。
起^{おこ}青^{せい}道^{だう}心^{しん}一^{いつ}成^{じやう}法^{ぽう}師^し。
伊^い勢^{せい}壺^う底^{てい}暗^{あん}斂^{しん}眉^{まゆ}。

虱

獨^{どく}臥^わ寒^{かん}衾^{きん}患^{うれ}幾^{いく}千^{せん}。
夜深依^よ被^ふ二^{はん}半^{はん}風^{ふう}食^{じき}。
余身貧極有^{よしんひんきはまう}誰^{たれ}憐^{あはれ}。
天^{てん}倒^{たう}二^い曉^{けう}鐘^{しやう}一^{いつ}未^な成^な眠^ね。

男根

一生思^{せう}衆^{しゆ}動^{どう}焦^{せう}身^み。
入^い道^{だう}修^{しゆ}行^{ぎやう}若^{じやく}時^じ事^じ。
八寸推^{はつすんおし}根^ね尙^{しやう}勝^{しやう}人^{ひと}。
須^{しゆ}臯^あ老^{らう}去^{きよ}靴^{くつ}頭^{あたま}巾^{きん}。

女淫

元來有^{もとよりあり}口^{くち}更^{さら}無^な言^{げん}。
百億毛頭擁^{ひやくいふまうとう}二^{ふた}丸^{まる}痕^{こん}。

一切衆生迷塗所。十方諸佛出身門。

寄三少人三首

紅顏緣髮冠。沙渴。況忘御年十二三。

若有貧僧憐愍志。寮前吹味致推參。

その二

少年十五月如出。一笑紅顏花似開。

木石無心多世上。嗚呼是此玉瘡哉。

その三

若衆天然好富貴。摺切爭可入御意。

無酒無茶又無餅。山僧風流只文字。

贊三兒文珠

看書忽忘七佛野。雲鬢霧髮少年姿。

手中經卷之何字。定有愁人小艶詩。

贊三阿彌陀佛

汝是桑願。一人不救。

我無一願。万民不泄。

贊三太黒

大黒尊天其面黧。諸人信仰置棚蔭。

平生愛鼠是何事。足下米囊不用心。

贊三布袋

菩提煩惱。睡裏乾坤。

寤寐恒一。佛無虛言。

青地錦切薄

本眞白物染青々。日本晴時如見星。

又有二縱茲思出事。宇治川畔亂飛螢。

八島檀浦合戰圖

射手名人能登守。兵法達者源九郎。

秋風有恨八島浦。狼藉忠信亡二菊王。

一谷合戰圖

万騎下山源氏兵。平家運盡出二堅城。

長江不洗英雄恨。日夜風濤戰鼓聲。

源九郎流弓圖

漫々蒼波已落弓。恰如三初月掛二晴空。

忽伸二左臂一取二來者。天下英雄在二穀中。

熊谷招二於敦盛一圖

生年十六美男兒。身命碎珠回馬時。

熊谷道心從之發。法念庵室念二阿彌。

七六 制札を倒して錢を取る

一 休和尚御在世のとき、下京松原通り中ほどに、ひとつの制札たてり、その札のこしらへやうは、板を丸竹にはさみ、その竹の中に錢を一ぱい入れ、左の如くかきつけたり、

一 餅食ひたがるもの、事、

一 酒すひたがるもの、事、

一 茶のみたがるもの、事、

右の通り、くひたくば、買ふて食ふべし、只世の中はみな錢なり以上、

年號月日

かやうに書きつけて立てありしが、一休折りふし通りかゝりて見たまひ、さてくめづらしき制札かな、いかさまこれは子細あるべしと、立ちよりてうかひ見たまふに、世の常の制札とはことかはり柱を竹にてこしらへたりしは、心ありげに見えたりとて、供のものに、汝この札を取りてかへるべし我少し思ふ仔細あり、はやとくとくせよと仰せらる、共の男申すやう、これは、和尚さまとも覺えざる仰せられごとな、かりそめにも、これは定めて公儀よりの制札ならん、しかるを無下に奪ひとつてかへらば、後のわざはいいかゝあらんか、我等においては、御免を蒙むるべしと申しける、和尚さま、たまひ、汝が云ふところも理りなれど、去りながら子細を知らねば爾いふも道理なり、先づこの札をはさみたる竹のうちを見るべしかならず錢あるべし、この立札は、この札をうばひ取るべしとのか

きつけなり、はやく取りてかへるべし、若したゝりあらば、汝が身には咎めはかけまじ、この一休が心にまかせおくべし、且つ我はあたまをまろめし身なれば、半錢も身にはつけじ、みな汝が穴一錢にとらせんほどに、はやくとれくと勧めたまへば、きやつもほしくやありけん、さもあらば取るべしとて、はしりよりて押し押し、まづかなめを引きてみて、あつばれ和尚は神通にてましますよと、よろこびいさみてうちかたげ、それ世の中にぬれ手で粟をつかむとはかやうのことをいふらんとて、ちどりあしにてむらさき野へぞかへりける、その後公儀にて、むらさき野の一休和尚、この札をうばひ取りたまふよし、ほのかにきこしめし、和尚に使を立てられけるに和尚かしこまつて、やがて目代にあがりたまふ、奉行曰ふ、如何に御坊、何とて往還に立てし札をうばひとられけるぞと、一休曰ふ、

さればにてい、制札のおもてを見いに、餅酒ほしくば買ふて食ふべし、よの中には錢があるほどにとか、れい、さても公儀は御慈悲にましますかなと、ありがたく存じ、特に貧僧の身なれば、取りてかへりていと、奉行きこしめし、根本これは、君よりお慈悲のため國々に立てられ、このかきつけのおもてをよく合點いたしたる者はこの札をうばふべしとのしたくなり、よし、かへりたまへと云ふ、一休かしこまつて、むらさき野へぞかへりたまふ、奉行曰ふ、さてもさても、あの坊主ならでは、かやうの札を引き抜くべきものはおぼえず、たとへ心を知りてうばひたく思ふとも、兎や角と思案し、或ひは世間をはいかり、即時にうばふべきものはまれなるべきに、何んのはいかりもなくうばひしは、希代の坊主かな、末の世にいたるとも、かやうの坊主は二人ともあらじと、感じたまひけると

なん、

七七 別法山心外寺

一休和尚は、關東の心外寺にしばらくおはせしが、この住持もそのかみ同學なれば、むかしのよしみを思ひ、いろく馳走したまふあるとき一休徒然のあまり、客殿に出で、四方をながめておはする折から、地侍とおぼしき人、供人四五人つれ來りて、一休和尚にむかひ、いかに御坊、この寺の寺號山號は、何と申すぞと問ひたまふ一休こたへて、山號は別法山、寺號は心外寺と申せり、しかして貴殿は、いかなる御方にてましますぞと問ふ、かの侍こたへて曰ふ、それがしは、矢奈木雪折と申して、この邊ちかき在所のものなり、この寺をかねくうけたまはりおよびしまへに、參詣申すなり、然